夢物語（上）

患者

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
青春は、夢を見なきゃ始まらない。

１０／１　タイトル変えました
『青春の風が吹いた』？『夢物語（上）』

目次

『プロローグだって、立派な話だろう？』――――1
『高坂穂乃果は、どこまでいっても高坂穂乃果』――――12
『勝った。』――――22
『あぁ、残念無念である。精々である』34
『μ's』――――47
『なんて、もう必要ないかもしれないけれど。』――――55
『言ってあげようぜ？おめでとうって』70
『入らせます、絶対に』――――81
『テレビの録画忘れた…』――――91
『今回の報酬はこれでいいやー。』103
『どうにかなんないかなぁ、難儀だ』112
『結局は南の意見に落ち着くのだった』120
『行け！星空凛ちゃん！君に決めた！』132
『流石は私の惚れた人だ。』――――141
『週刊少年ジャ○プじゃないっすか』148

『プロローグだって、立派な話だろう？』

あれは、高校二年の春が始まりだった。
春から始まった、９人の女神の話。
気がついたら集まっていた、まるで本当の女神のような９人。
私なんて精々、女神を敬う民Ａなんだろう。
でも、あの９人の話はしておきたい。終わりを始めに変えた、あの９人の話を。
私なんかには役が重すぎるが、精々語らせてもらいます。だって、私にできることなんて精々その程度だから。
終わりもあるように、始まりもある。始まりがなければ、終わりもない。そんなものである。
必要なものなど、ただ一つ。
私に出来る、ただ一つのこと。
まるで夢のような物語、夢物語。
それを、語ることだけ、語るしかないだけ。
だから、あの春のことから語ります。始まりだって、必要だろう。そして

プロローグだって、立派な話だろう?

001

桜満開。

身を焼くような暑さもなく、身を凍えさせるような寒さもない、春。体が弱い私はこの時期の花粉症によく苦しめられる。桜自体は嫌いではないのだが。どの季節にも良いところも悪いところもあるから、別に春だけが特別という訳でもないのだが。まぁ、精々体が弱いなりに、二年生となった学校生活と春も楽しもう。

と、思っていた矢先なのだった。本当に、なんなんだろうと思った。

【廃校】

目の前で幼馴染みが気絶していく様子を見ながら、私はいるかもわからない神様を恨んだ。
『精々って話でもないよ…本当に…』

００２

ガラッ。
と、扉が開く音と共に気絶した幼馴染みが教室へ帰ってきた。その顔は実に暗い。
まぁ、そうなるだろう。彼女ならば
「穂乃果ちゃん…」
「ことり、穂乃果は勘違いをしているのです。ことりが思っているような事は思ってませんよ」
「だってぇ!テストとか受けなきゃならないんでしょ!?」
短くカットしたが、纏めるとこう。
学校が廃校→他の学校へ行くためテスト→自分は学力が低い→うわぁぁ!
勘違い甚だしいが、彼女の頭は学力と比例して少し水準より低いので、精々責めてあげないでほしい。

とはいえ、それはさっきから言っている通り勘違い甚だしいので、私の口から言うのもどうかと思うが、精々頑張って説明をするとする。何故ならば、このまま行くと彼女が恥を掻いてしまいそうだから。

「高坂、それは誤解で勘違いだ。この学校が廃校になるのは精々今の一年が卒業してから、つまり、私達がテストとかで悩む必要はない」

「え?·そうなの?·なーんだ!·」

相も変わらず表情が面白いぐらい変わる幼馴染みである。まぁ、私が精々頑張って説明した甲斐があるというもの、あの後パンを美味しそうに食べる彼女からは心配という文字は消え去っていた。

いやまぁ、定期テストとかは普通にあるのだが。今言うのは野暮というものではないだろうか。

「いや～、今日もパンがうまい!」

単純な奴である。そんな元気が私にも少しでもあればいいのだが。幾分、私は外で動き回るというよかは、室内で一人大人しくＴＶでも見ているインドア派なのだ。それなのに、元気一杯野原を動き回るタイプの彼女にはよくつれ回されたものである。

話は戻すが。この学校、つまりこの音ノ木坂学院のことだが、廃校になるのである。まぁ、元々そんな感じはあった。

三年は高校にしては少な目の3クラス。二年はもっと少なく2クラス。今年入った一年なんか1クラスである。

3、2、1。つまり次は。なんて、安易の予想出来た事態でもある。少子化なんて言っているが、結局は色々と悪いのだ、立地が。詳しくは面倒だから省くが、近くに全国屈指の人気校があるといえばわかるだろうか。勿論、それ以外にも理由はあるが、まぁ、私が語っても仕方ないことである。

「この学校、無くなっちゃうんだ…」

「そうですね…」

「うん…」

「残念だな」

「もー！夢ちゃんもっと危機感もってよー！」

そのままの意見だったのだが、プンスカと怒る幼馴染みには不評だったらしい。いやはや、私にとって学校とはあくまで勉学を学ぶところではあるのだが、友人と騒ぐという意味ではとても楽しい場所ではあるのだろう。おや？そう考えると途端に学校が恋しくなってきた。学校サイコー

「少しいいかしら」

と、学校の事を考えすぎて目の前に人がいるのに気付かないとは、失礼なことをした

ものである。金髪の…三年生。その顔には見覚えがある。そう

「生徒会長さんが何かようですか?」

例え初対面でも、相手は三年生で生徒会長である。敬語は忘れずに、あの穂乃果でさえ上級生には敬語で話すのだから。いるとすればあってみたい。生徒会長に初対面からタメ口で話せる人を。多分居ないだろうけど。

一応、生徒会長の後ろに、もう一人先輩がいるが、関わるようなことはしてないので、割愛する。

「私が用があるのは、そちらの南ことりさんよ」

南ことり。

私の隣に座っているとても可愛い私の幼馴染みである、が。恐らく真に用があるのは南ではなく南の母親ではないだろうか。ことりの母親はこの学校の理事長であるから、もしかしたら廃校について聞きたいのかもしれない。生徒会長だし。

「理事長は何か言ってなかったかしら?」

「いえ…特には、私も今日知りましたので…」

「そう…お手数取らせたわね」

そう言って、二人の先輩は去ろうとする。まぁ、それで終わりなら終わりだったのだろうが、生憎、私の幼馴染みは行動力に溢れている。溢れすぎているとも言うが。

「あの！」
　本当に、終わりにしないのが私の幼馴染みである。それが穂乃果の良いところでもあるのだが、真っ直ぐで、正直で、少しお馬鹿。けど、やると決めたらやる奴だ。こんな状況でも動く。
　本当に、私と違ってとんでもない奴である。
「…何かしら」
「本当にこの学校…無くなっちゃうんですか？」
「……そうさせないためにも、生徒会は全力で阻止するつもりよ」
「なら、精々頑張って廃校を阻止して下さいね」
　幼馴染み三人が私の方を向く。いや、嫌味のつもりでもなんでもなく、本当に頑張ってほしかっただけなのだが…私の雰囲気のせいだろうか。難儀なものである。
　無理だろうとは思っているが、確信めいたものだが、今のままでは廃校は免れない気がする。けど、一応は頑張ってー、と言っておくのが良いのである。それがどんな意味であれ。私の学校ライフの為に頑張ってー。
「……言われなくても、そうするつもりよ」
「応援してますので」
「……失礼するわ」

私が頑張って言葉を口にしたというのに、生徒会長はどこか苦い顔であった。やっぱり、自分でも気付いているのではないだろうか、このままでは無理だということに。頭も悪くなさそうであったし。

そしたら後ろの先輩も「ほなな」と言って去っていった。どこかイントネーションに首をかしげたくなる関西弁であったが、関西の人はああなのだろうか。テレビのほうが違うのか。

なんて、精々長々の語っているのは、このあと幼馴染みが言うであろう言葉を少しでも先伸ばしにしたいからかもしれない。だって、間違いなく、巻き込まれるから。私はわかっていた。

「凄いですね…夢は。三年生にあの態度とは…」

「普通に応援しただけなんだがな」

「そういう風には聞こえなかったよー?」

やはり、どこか喧嘩売ってるように聞こえるのだろうか、難儀だ。まぁ、それがわかっただけよしとする。これからは精々それを治す努力をするさ。しないと後々大変そうなのでな。

ふと、高坂の方を見た。やっぱり何か考えている。わかりきっていたが、次言うセリフを予想する。多分、この学校を無くならせたくない、とかから始まるのではないだろ

うか。

「……やっぱり、私！この学校無くならせたくない！」

ほれ見ろ。

はぁ…と一つ溜め息をついて、隣の園田にＧＯサインを送る。園田も一つ溜め息をしてから、穂乃果へ返信をする。

「…そうは言いますが穂乃果。この学校を受ける生徒が少ない現状、どうやって学校を無くならせないというのですか」

「それは……そうだ！この学校のこともっとアピールしたらいいんだよ！音ノ木坂はこんなにもいいところですって！」

そんなとこだろうとは思った。そう簡単なものではないと思うのだが。まぁ幼馴染みが頑張って捻り出した考えである、上手くいきそうにはなくても、精々手伝ってやるか。どうせ他の案があるわけでもないし、このまま廃校もどうかと思うし。穂乃果は設計図はないけど、やる気ある人間だ。

と、瞬きを一つ。

００３

「だめだぁー!」
「そもそも、アピールした程度で生徒数が増えるのならもう既に廃校手前にはならないでしょうね」
全くもって園田の言う通りである。そもそも、伝統があって、歴史があって、古くからあるって。言い方違うだけで、全部【古い】と言っているだけだ。なんてインパクトの欠片もないのだ、古いだけなら他にもある。
「どぉーしよぉー!!」
幼馴染みが叫ぶ。こんなときに言うのもなんだが、本当に表情豊かな奴である。豊か過ぎるとも言える。
『とりあえず、今日は一旦解散にして、後日また考えましょう』
『お母さんにも聞いてみるね』

そのあと、二人の言葉によって一旦解散をした私達。
はてさて、難しい話である。確かに、生徒不足で廃校になるのだから、生徒を集めれば廃校を免れる。という、わかりやすいことではあるが、それが一番難しい。園田も言っていた通り、特徴で生徒が集まるなら、今でも生徒は集まっているだろう。
しかし、穂乃果のしようとしてることは間違っているより、寧ろ正しいとさえ思う。

生徒不足を防ぐためには人気を上げる、そのために何かをしようとしている。方法はないが、発想は間違っていない。だから、方法を考えるだけでいい。人気のない学校の人気を上げるための方法を考えるだけである。精々、私は高坂辺りが発案するのを待つとする。精々で、散々な私が考えるより、そっちの方がいいと思う。

なので、これからおこる出来事の発端になることを、私はこう思う。

青春は、何かやらなきゃ始まらない。

『高坂穂乃果は、どこまでいっても高坂穂乃果』

００４

高坂穂乃果。
１６歳Ｏ型獅子座、身長１５７ｃｍ。
スリーサイズは上から７８、５８、８２。
好物はいちご、嫌いな物はピーマン。
八月三日産まれで、パン派。
そんな彼女を簡単に言い表すなら、馬鹿正直。
私達、幼馴染みグループの中でも突出して行動力に溢れた人物だ。そしてトラブルメイカーでもある、とは園田海未談である。
しかし、そうは言い合うものの、彼女らの関係は伊達に長い付き合いしていない。なんだかんだ言って、お互いがお互いのことを好きなのだろう。断じて百合的な意味ではないと、本人達の威厳のため、此処に記す。
閑話休題

行動力に溢れた彼女は、私達三人をよく連れ回し、巻き込み、騒いだものである。しかし、タイプもキャラも全然違う我々がそれでも誰も欠けずここまで来れたということは、やはり全員が全員、高坂穂乃果という人間を好いていることに違いはない。その屈託のない笑顔は、知らぬ間に周りも笑顔にさせていた、という逸話もある。

だからこそ、そうであるからこそ、今回もどんなぶっ飛んだ案を出すのかと少し心配していたのだが、今回のはぶっちぎりでぶっ飛んだものだった。ぶっ飛び過ぎて、心配もこうもない。一周回って笑いすらでた。本当に、私の幼馴染みはとんでもないことを言う。

『アイドルだよ！アイドル！私達四人で、スクールアイドルをするんだよ！』

本当に、高坂穂乃果という人間は、どこまで行っても高坂穂乃果という人間なのだろう。

００５

高坂の話が始まって園田が教室から逃げ出すのを横目で見ながら、高坂の説明を聞く。

それにしてもやけに瞳をキラキラさせている。よっぽど、そのスクールアイドルとや

らが気に入っているように見えた。
「でね！人気のスクールアイドルがいる学校は入学志願者も増えたんだって！」
「それを私達で…？」
「うん！」
やれやれ、と内心呆れる。
確かに方法が欲しいとは言ったが、まさかアイドルとは。園田が『ア』の字が聞こえた瞬間に逃げたのがわかった。あいつ、意外と臆病だからな。この中で一番腕っぷしは強いのに。
入学志願者が増える、というのも、先程高坂が自分自身で言っていた通り、人気が出た場合だ。その逆、つまり人気が出ない場合だ。入学志願者が増えないだけではない、下手すれば学校にさらに悪評判を塗るかもしれない。が、どうせ、このお馬鹿はそんなリスク考えていないだろう。
瞬きを一つ。
世界は理屈で出来ている、下手な行動はするべきではないのだ。
だが、それも、『高坂穂乃果』が言うなら話は変わる。何故なら、彼女のやってきたことは失敗こそあれど、私達を含め、後悔することはしたことがなかった。絶対、と言っていいほど彼女がやることは後悔はなかった。

だから、今回も、と私は思ってしまう。
「海未ちゃん！」
「無理です！アイドルなんて無理ですぅ!!」
「あぁ!?海未ちゃぁーん！」
残念ながら、逃げる園田には不評のようだが。難儀なことである。

００６

「むぅ…いい考えだと思ったんだけどなー…」
南の奴はどこかへ行った。大方、園田の奴のところだろうが。
まぁあっちはあっちで任せることにして……ということで、私は高坂が一人、校舎の裏で練習するのを付き合っている。が、今は少し休憩である。素人は少し踊るだけでも辛いものだ。クルクル回って倒れたり、足が絡まって倒れたり。素人には幾分キツイ。
「夢ちゃんはどう思う?」
私へ意見を求めるか。まぁ、嘘言っても仕方ないので。精々、そのままの私の素直な意見を返させてもらう。
「ハイリスクハイリターン、だな」

成功した時のリターンは大きいが、失敗した時のリスクも大きい。しかも、今回は失敗の方が確率高いときたものだ、普通はそんな賭けしない、する筈がしない。

だけど

「でも、お前がやると言うならやればいいさ。お前は何も考えてないだろうが、考えは間違ってないと思う」

そのまま、本当にそのままの意見である。

「…ちょっと馬鹿にしてない？」

「してない」

「してたよー！」

もぉー！と怒る幼馴染みからは、本当に迷いというものを感じない。本気なんだろう、間違いなく。本気でない人間がこんなにも真っ直ぐ目を合わせて笑えるだろうか。否である。

しかし、だからこそ、それだから、私は一緒の歩けないことを残念に思う。

「まぁ、私は足をやられてるからな。残念だよ、お前と一緒に踊れないなんて」

詳しくは省く。ただ、一つだけ言うと、私は足が不自由で車椅子に座っているということだ。本当に、残念だ。可能ならば、私もあいつらの隣にいたかった。四人で歌って踊りたかった。

「うん……でも！夢ちゃんにだって出来ることはあるよ！ぜーったいに！」
根拠のない自信ほど空虚なものはないというが、彼女ならば根拠がなくても空虚ではないのではないかと思えてくる。
今は精々、その言葉を受け取らせてもらうとする。
「なら精々私にも出来ることを探すよ。お前は、踊れない私の分まで精々踊ってくれ」
「…うん！よぉーし！練習再開だー！」
ラジカセ…でいいのかな、ああいう物から曲が流れ始め、高坂はそれに合わせて踊る…まぁ、こけてばっかりだが。
「いったーい!!」
腰辺りを擦る高坂に、手が伸ばされる。どうやら、上手くいったようで、何よりである。
「一人で練習しても、仕方ありませんよ」
「海未ちゃん…！」
「穂乃果ちゃん」
「ことりちゃん…！うわぁぁ！二人ともありがとー!!」
高坂が二人に抱き付くのを見ながら、私はことりにグッドを送っておく。
返事はウィンクと、洒落た奴である。

それに対して私の返事は瞬き。なんとも色気のないことである。

００７

「認めるわけにはいかないわ。部活申請には、最低でも５人必要よ」
「ですが！５人未満でも活動してる部はあります！」
「開部したときには５人だった。違う？」
園田が即論破される。生徒会長の勝ちである。伊達に生徒会長はやっていないようだ。
どうやら、部活申請には最低でも５人が必要なのである。言っておくがこのことは知らなかった、生徒手帳なんて見たこともない。
しかし、だとすれば、正直メンバーに入れていいかわからない私を百歩譲ってメンバーに入れたてしても、４人。一人足りない。この世には１つ足りなくさせる妖怪がいると聞くが、こんなところにも出没するとは思わなかった。
まぁ、人数が足りないなら仕方ない。早々に退出するようにと、隣の高坂に合図する。それに高坂はコクン、と頷いて。『失礼します』と言った。今回は物分かりがよかったな。と、高坂がドアノブに手を掛けたときである。

「こんな時期に部活申請、それもアイドルなんて。貴方達、何をしようとしているの?」
止めろ生徒会長、それを聞くと話が面倒になる。ほら見ろ、高坂の奴が振り向いてしまったではないか。
「この学校を、存続させるためです。スクールアイドルで学校の人気をあげるためです」
この世には、言わなきゃいいことと、言わなきゃいけないことの2つがあるが、この場合は間違いなく前者である。残りの学校生活を満喫したいから、とかでも理由はつけれた筈である。たとえ後々バレようとも、今はそれで言い訳できたのに。幼馴染みは、少し正直すぎる。
「だとすれば、もっと認めるわけにはいかないわ」
「どうして!?」
「貴方達がすることが…」
それから生徒会長が話した内容は私が前述したメリットの内容と似ていた為、割愛する。
ハイリスクハイリターンで、失敗したら悪評判になるかもと、そもそも成功の確率の方が低いとか。
「それに、残りの学校生活、何をして、何をするべきか、よく考えなさい」
確かに、真面目な人から見れば一生徒が学校の為と理由をつけて、半端な覚悟で頭

突っ込んでるだけに見えるかもしれない。高坂穂乃果のことを知りもしないで何を言うかと思えばそんなとこである。まぁ、反論のしようもないので、精々、捨て台詞を一つ吐いて退場するとしよう。

「やろうとしてる姿勢が大事だと思いますけどね」

捨て台詞にもなりきれてない捨て台詞だったと、自分でも思う。

００８

しかし、一体これからどうするのか。５人目の当てはない、曲もない、衣装もなければ振り付けもない。勿論、私を入れてもらっても困るし、この足では踊るのなんか到底無理である。困ったという話ではない、絶望的が正しい。

「これから一体…」

『どうすればいいの．…

私もそう思う、どうすればいいかわからない。ノープランで、ハイリスクで、何もかも０である。

でも、彼女なら、高坂穂乃果なら、こういうとき、必ず言うだろう。

「だって可能性感じたんだ…そうだ…ススメ…！」

間違いなく言う。彼女なら、可能性だとか、後悔したくないだとか、道があるだとか、恥ずかしげもなく、声一杯で言うだろう。

「後悔したくない目の前に、僕らの道はある…！」

だから、高坂穂乃果は高坂穂乃果で、どこまで行っても高坂穂乃果なのである。

Ｌｅｔ、ｓ　Ｇｏ!!

だからこそ、私達は高坂穂乃果に惹かれる。あの、太陽のような笑顔に。

「私、やっぱりアイドルやる！やるったらやる!!」

なんだかんだ言って、皆好きなのだ。高坂穂乃果のことが。あの、みんなを引っ張る笑顔と手が。勿論、私も。

……でもな、道端で急に歌い出すのは流石にやめたほうがいいと思う。

『勝った。』

００９

春にしては日が照った日のことである。

先日、生徒会長に喧嘩を売ったわけだが、いやいや不名誉のないように言っておくが、別に学校を敵に回すようなことはしていない。断じてだ、精々、生徒会長に捨て台詞を吐いて逃げ出してきた程度である。捨て台詞と言っても、捨て台詞にもなりきれていないお粗末なものだったと思うが、どうも生徒会長には受けが悪かったようであった。私にとっては随分と頑張ったと思うのだが、いやはや、とても難儀なことである。

話を今日のことに戻そう。

朝のことである。高坂の奴が珍しく良い案があると言い出したので、期待半分。いや、悪寒六割で話を聞き始めたのである。

とはいえ、メンバーが足りないという事実に気付いたのだから、流石にそのことを話すのだろう、と１％でも思っていたのだった、思いたかったのだが。流石に高坂にアイデアを求めた私がアホだった。お馬鹿は高坂だから、アホは私である。

それは、また、何時ものように高坂穂乃果がお馬鹿なことを言い出したわけである。色々と言っていたような気はするが、一行に纏めて省略するとこうなる。

「ライブしようよ！講堂借りて！」

考えはわからないでもあった。確かに、講堂では近々新入生歓迎会がある。この、たださえ人の少ない音ノ木坂学院に入ってくれたもっと数少ない新入生を部活や生徒会が歓迎の会を設けるといったものだった筈だ。私も去年参加した覚えがある。

とはいえ、だからといって。その新入生歓迎会があるとはいえ、高坂の奴は目先のことしか考えていない。と、私は思うのだが、はたして、間違っているのは私なのか高坂のほうなのか。誰かわかるなら教えてほしいものである。

「おそらく、いや多分…いいえ、絶対的に夢のほうが正しいです」

「あはは…」

南はどっちつかずだが、園田から票を貰ったので1対0で私の勝ちである。はて、なんの勝負だったか。

まぁ、それはいい。勝ち負けなんて拘っても碌なことにはならない、と私の長年の経験が言っている。私、十代だけど。

話が逸れた。とまぁ、色々言いたいこともあるが、とりあえずは一文だけ。

今はまだとてもじゃないが、ライブなんてほざける時ではないので、精々目処がつい

てからにしろと。精々な私が助言を送らせてもらう。
「えー、やろうよーライブー！」
　話を聞いてやがりますかねこのお馬鹿は。もしかして彼女の辞書には目処やら計画やらという言葉が欠陥しているのかもしれない。ナポレオンもびっくりだ。だとすれば、もっかい人生やり直せ、と言いたい。
　失礼、随分とんでもないことを口走った気がする。日頃はこんなことは言ったりしないので、今回が特別だったと思って許してほしい。
　しかし、高坂の発言に間違いはない。ただ、お馬鹿なだけなのだ。
「わかった、お馬鹿…じゃなかった高坂。お前の気持ちはわかった、だから別のやり方にしよう」
「別のやりかた？って夢ちゃん、今私のこと馬鹿に…」
「今生徒会長のところへ行ったところで門前払い……にはならなくとも、精々話を聞くだけ聞いてダメ、と言われるだろう」
「うん、そうだね。けど夢ちゃん、今お馬鹿って…」
「しかし、新入生歓迎会にライブをしたいのは私も同意見だ。人気をとるなら、多少リスキーでもデカイところに出たほうがいい」
　お馬鹿？さてはてなんのことやら。巷には気にしたら負け、なんて言葉があるぐらい

なのだから、多少のことは無視しろということなのだ、そうに違いない。
そう、気にしたら負け、気にしたら負けなのだ。言い訳にしか聞こえないのは耳が悪いか空耳だ。そうに違いない、そうであってほしい。
瞬きを二回。
「だから、アイドルのことは伏せて講堂の使用許可だけ取ってこい、理由はなんでもいい、発声練習がしたいだとか、楽器を演奏したいだとか、動画を撮りたいだとか、なんでもいい。だが、アイドルのことは伏せろ。それだけは、絶対だ」
「うん」
「あと、実際に生徒会室に入って許可をとるのは、園田だ」
「へっ？」
「どうして？」
「お前だとペラペラ話しかねないからだよこのお馬鹿」
「あー！やっぱりお馬鹿って言ったー！」
お馬鹿お馬鹿ー、と高坂に攻撃を受けている後方で、園田が抗議の声を上げている。
前方で高坂が『いじめられたー！』と南に泣きついている。
昔からこうである、大体私が提案するとこういう図になる。性格と正確の問題から、高坂を後ろにして園田を前にしがちになる。それが両者にとって不満らしく、よく私は

挟まれて異議を申し上げられる。園田が一番真面目だからなんだけど、どうやら不満のほうが多い。難儀である。

「ちょ、ちょっと待って下さい！何故私なのですか!?ことりもいるのに!?」

「わかるだろ？」

「うっ…」

高坂が園田を引っ張り、南が高坂を見張り、園田が泣きながら私の言うことをきき、私は三人に車椅子ごと押される。

昔から変わらないスタイル。実際、私もこの並びは実に心地よい。いつまでも、この四人でいたいと思うほどに。

だけど、変わらないものは素晴らしい、とは聞いたが、この場合園田は、性格を少々改善すべきなのではないか、私は常々思うわけである。そんなことだから、私に臆病者なんて呼ばれるのである。

この場合は、本当に園田しか頼れないからしている訳である。私はどうやら生徒会長に嫌われているようなのだ。そうでなければ私が行くのだが。

「頼むよ園田」

「で…ですが…」

この臆病者め。

仕方ない、奥の手を使うことにする。恨むなよ園田、恨むなら自分の弱さを恨め。
私は、高坂に抱きつかれて満更でもない表情をしている南に目で合図を送る。南はそれに気付いて微笑みで返す。相変わらず返事が無駄に洒落ている。
「海未ちゃん」
「な、なんです…？ことり…？」
「……おねがい…？」
新パターンだ珍しい。上目使いと静かな声。まるで子が親におねだりするかのような『おねがい』だ。あの声でお願いされると園田の奴は弱い。
「うっ…ことりまで…」
「海未ちゃん…」
「海未…ちゃん…？」
「園田…」
「わ、わかりました！わかりましたよ！わかりましたから！その甘い声を止めて下さいいい！」
勝った。

０１０

園田の奴は生徒会室へ、高坂と南はそれを遠目から見る係。なら、私はなにをしているのか。簡単である、分担作業だ。

仮にライブをするとして、必要なものは多々あるが、最低でも必要なものは、

名前
場所
衣装
曲
歌詞

の５つ、最低５つ必要である。曲は現存のものを使用すればいいのでは?と、園田から質問を受けたが、それは止めたほうがいい。私達が求めるのはあくまで知名度と人気であって、アイドルとしてではない。勿論、アイドル活動は大切だが、学校を助けるために始めたアイドルである、前提を忘れてはならない。だから、最悪そうしなければならないなんて事態にならない限り、曲はオリジナルのものを用意したほうがいいだろう。

では、次に衣装と歌詞だが、これらはうまい具合に出来そうな奴が二人いるのでそいつらに任せる。場所は今取りに行ってるし、名前は後でいい。

となると残りは先程も言った、曲。
これが大変である、歌詞が出来ても曲が無ければただの詩だ。
だから私は、そうやって不自由な体を動かして、精々でいいから曲作りの出来る人はいないかと探しているのである。
「と言っても、現二年の中では顔は広いつもりだが…」
つもりである。だがしかし、残念なことにそんな特技を持った現二年は見たことない。
もしかしたら隠してる可能性はなきにしもあらずだが、そういう奴は問いただしても知らない、と答えるやつが多数なのである。南のアレとかな。
音楽の教師に頼むのも一つの案であるが、これも残念なことに私は音楽の教師もあまり面識がない。はたして言葉2つで返事してくれるとは限らない。下手すると鼻で笑われる。流石にそれはないだろうけど。
…だがしかし、園田をああやって行かせた手前、私も何かしないわけにはいかない。折角高坂直々にマネージャーに指名されたのだから、これぐらいはやっておきたい。
では、こういうことの基本はまず情報収集からである。始めるぞ、ワトソン君。
ところでだが、私ワトソンと呼んでいるが、翻訳によってはワトスンとなることもあるらしい（寧ろそっちが主流？）。本当に、どうでもいいことであるが。

と、瞬きを一つ。

011

おおよそ1時間。本当はもっと過ぎているかもしれないが、多分その程度だろう。
さて、わりと情報は集まった。私の顔の広さとあと色々のおかげで早めに終われた。
私の顔様々である。
それでは、軽く情報を纏めるとする。
ひとつ、三年生にバレエをやっている人がいる
ふたつ、音楽室からピアノの演奏と綺麗な歌声が聞こえた
みっつ、一年生に歌の上手い子がいる
よっつ、今は学校来ていないが、三年生に音楽に精通した人がいる
いつつ、理事長は実は歌が上手
最後はまぁ、南にでも確認とったらわかりそうなので置いておく。
ひとつめは、あくまでバレエである。確かにバレエで音楽は使うが、あくまでバレエは踊りである。曲作りが出来るとは期待出来ない。
よっつめ、これは良物件だが期待はできない。聞いた話、その先輩が家庭の事情で不

登校らしい、いつ来るかもわからない人を待つのは流石にリスキーが過ぎる。
そしてふたつめとみっつめが…
『ｐｒｒｒ』
携帯が鳴った。
滅多なことで鳴らない私と携帯へ鳴らす人物なんて、両手で数えなくても足りるので、どんな人物が電話なんぞを掛けてきたのかななんて、わりと予想がつく。
ゆっくりと携帯を持ち上げ、通話ボタンを押す。
「もしもし」
『あ！夢ちゃん。今どこにいるの？』
「音楽室前」
『音楽室？』
「色々理由があってな。それで？どうかしたか」
『あ、うん。練習場所探してて。どこか良いとこない？』
練習場所。それはまぁ、初歩的なものがないものである。だが、確かにこの学校で活動出来るところなんてたかが知れている。グラウンドと体育館は運動系の部活がほぼ占領しているし。空き教室という手もあるが、電話を掛けてきたということはもう試したのだろう。教師に鼻で笑われるところまでは予想できた。

ではではさてさて、では残りで練習が出来そうな広い場所といえば、私の知る限り一つ。
「屋上、かな」
『屋上？』
屋上。残念ながら私は基本エレベーターでの移動なので、階段を登る必要のある屋上なんて行く機会もないが、この学校の紹介で広そうな屋上があったことを記憶している。
「おそらく雨も凌げないし、日陰も少ない。だけど、今は精々そこぐらいしかないと思う」
『そっか…うん、わかった。行ってみる』
「あぁ、頑張れ」
『うん！頑張る！』
ピッ、と通話をきる。
おやおや、長々と携帯を弄っている内にお目当ての人物が到着なさったようである。
これはベストタイミング。
「こんにちは、初めまして、西木野真姫一年生」
言いかけていたふたつめとみっつめの人物の正体はこの一年生だと私は推理する。

とまぁ、そうは言っても知り合いから聞いた情報を元にさらに調べただけなのだが。
おそらく間違いはない筈だ。
「貴方は…」
「私の名前は千里川夢、二年生。気軽にセンとでも呼べばいいさ」
千里川という、珍しい苗字。私の家系以外いないんじゃないか?とたまに思う。
まぁ、それは今はどうでもいいのだが。
「折り入って、頼みたいことがある」
これからの映像は、先輩がみっともなく後輩に縋る映像だ。見たい人だけ見ればいいさ。映すとは言っていないが。

『あぁ、残念無念である。精々である』

０１２

『悪いですけど…そういうのはお断りします』

簡潔に、そして完結に結果を話そう。

結果は失敗であった。

余りにも簡単に、余りにも激烈に、お断りを頂いてしまった。一年生に、正面から拒否されてしまった。

とても傷付いた、とてもとても…私なんて所詮はこの程度なんだと、遠回しに告げられてるようでもあった。幼馴染み三人と比べたらお前なんかタダのモブキャラなんだと、暗黙に言われている気分だった。私の精神だだ折れである。

あぁ、無念である。精々である。

『ｐｒｒｒ』

心無しか、携帯の音も弱く聞こえた。

それは気のせいだろうけど。

『あ、夢ちゃん?』
おや、高坂かと思った南であったか。珍しい。
電話自体が珍しいが、高坂以外の奴からなど、もっと珍しい。
「どうした」
『屋上、大丈夫そうだったよ』
「そいつは上々」
『あとね…曲のことなんだけど…』
さっき交渉を失敗したのがバレてるかの如くのベストタイミングだった。
この場合はバッドタイミングなのかもしれないけれどら、
「あぁ、こっちは駄目だったよ」
『うーん……あ、今日穂乃果ちゃんの家で会議あるから、そこでそれも話そっか』
「ｇｏｏｄ　ｉｄｅａだな。いいよ、そこで話そう」
『うん』
ピッ。と通話をきった。
どうやら私の失敗を話す約束になってしまったようなのだが、世の中は上手い具合に出来ていて、なんと失敗からでも成功は生まれるらしい。
何が言いたいかと言うと、こんな私でもその例には外れず、失敗から少々学んだ。失

敗は成功の母様様である。
そして、学んだことというのが、勿論あの一年生のことである。
簡単に言えば、あの子のようなのタイプは、高坂みたいな奴が一番効果的なのだろうとわかった。
高坂みたいに、真っ直ぐで熱い奴が。
馬鹿な奴が。
「どうりで私は無理なわけだ」
今となっては、おそらく言い訳にしかならないのだろうけども。

０１３

高坂の家は和菓子屋である。
その和菓子は絶品で、厳格そうな親父さんが作る和菓子は、園田の奴にも好評である。
かくいう私もよく買いにくるのであるが、お薦めは団子である。
上手いよな、団子。
高坂の奴は食べ過ぎて飽きているだとか、学校でよくパンを食うのはそのせいだとか。贅沢な奴である。

話を少し戻して。

てなわけで、私は高坂の家へやって来たわけだ。

入り口から入り、高坂の母親に挨拶を交わしつつ、店の裏の和室へ。

「すまないな、本当は二階でやったほうがよかったんだろ」

「いえ、別に此処でも特に変わりはありませんから」

「そうだよー。それに、もっと寛いでいいよ!」

珍しく車椅子から降りた私は、高坂の家の、つまりは和菓子穂むらの、裏の一階和室にて座っている。

高坂の部屋は二階にあるのだが、不甲斐ない私のせいで二階まで一人でいくのは少々無理がある。苦労を掛けてしまうものだ。

「穂乃果のほうが迷惑掛けられてますよ」

「それもそうだ」

それを思うと気が楽になった。高坂がえー!?とお馬鹿しているが、無視して、話…いや、会議が始まった。

「曲がないよーー!」

高坂が全員の気持ちを代弁した。

私が失敗したばっかりにだ。

そして、私の予想は西木野真姫一年生で間違ってなかったが、どうも私には説得は無理なようだ。ということを、私はこと細かに説明した。
「真姫…って、どんな子？」
「歌が上手い、ピアノが弾けて、クールで冷静沈着っぽいＡＢ型みたいな感じを晒しながらどことなくツンデレっぽい雰囲気をかもしだしている一年生だ」
「…うん？見た目はどんな感じ？」
やけに高坂がつっかかってくる。もしかして何か知ってるのだろうか。
「赤みがかった癖毛、目は少し鋭く。私の見立てでいいなら３サイズは上からバスト７０後半、ウエスト５５…いや、５６か。ヒップ…８０…２、３…ぐらいか。身長は見た感じ私より少し高かった」
「…あの子だ…」
この反応を見るに、高坂は多少なりとも西木野真姫一年生と面識があるようだ。
何時何処で知り合ったかは知らないが、もしかして高坂も彼女に声掛けていたのだろうか。だとすればダブルブッキング。いや、意味も使うタイミングも違うが、語呂がよいので使った。
深い意味など特にはなかった。
「あの音楽室にいた子だ！」

「穂乃果ちゃん知ってるの？」
「うん！すっごく歌が上手でね！ピアノも上手いんだよ！一回アイドルに誘ったんだけど…断られちゃって」
どうやらスクールアイドル云々を言ったあの日のあの後、私と南が園田探しに行った一瞬の間に出会っていたらしい。巡り会ったとも言っていい。
とても行動的な奴だと、改めて思った。
だが、面識があって顔も知り合っているなら話は早い。
「それなら話が早い、そのことをお前にしてもらおうとしてたんだ」
「何を？」
「西木野真姫一年生は、お前がスカウトしてこい。ああいう奴は、お前みたいな奴が一番効果的だ」
「私が？」
「元々してたことを曲作りに変えるだけだ。そもそも、お前も勧誘、するつもりだったんだろ？西木野真姫一年生」
「…うん」
「なら、より一番だ。西木野真姫一年生の件はお前に任せる、高坂。お前が、あのプライドの高そうな一年生を引っ張ってこい」

「…うん、わかった！…よぉし！頑張って西木野さんをスカウトするぞー！」
前向きだな、と私は切実に思った。今日、断られたという話を聞いたばかりだというのに、諦めるという言葉を知ってるのだろうか。
いや、この場合は知ってようと知ってなかろうと関係ない。彼女ならどっちにしてもやっただろうから。
そして、好都合でもある。これで曲のほうは安心出来た、後は作詞と衣装である。
と、言うけど衣装のほうは問題ないだろう。
「あ、そうだことりちゃん、衣装出来たの？」
「うん、ちょっと書いてみたの」
南の差し出したスケッチブックには、まさにアイドルが着るようなヒラヒラした可愛い衣装が色鉛筆で描かれている。
これは出来たら凄いだろうが…
「出来るのか、南」
「うん、ここのカーブがちょっと難しいけど、頑張って作ってみる」
「すっごく可愛いよ！頑張ってことりちゃん！」
「うん！」
と、やはり問題はなかったようである。

南は昔から衣装を見るのも好きだったが、裁縫とかも上手かった。私も時々服を着せられたこともあった。

メイド服とかは流石に断ったが。

しかし、その分衣装に関しては人一倍熟知している。任せておけば大丈夫だろう。

「…ことり…このスカート短くありませんか？」

「え？そうかなぁ」

……訂正、少し問題があるかもしれない

「スカートの丈は膝より下、ですからね？」

「えぇー!?」

「わかってますね？ことり」

「海未ちゃーん、アイドルなんだからさー。攻めていかないとー」

「アイドルだからって…別に膝より上じゃないといけないなんて決まってないでしょう!?」

あーだこーだ。園田は少々のところでしつこい。脚ぐらいなんだと言うのだ、別に人に見せて困る脚なんてしてないだろうに。むしろ見せれるだけありがたいと思え。私なんか動かせないんだぞ

「それはそうですが…ですが、少々ではありません！脚ですよ!?脚が出るんですよ!?破

廉恥です！」
はいはい…そうですかっと。
そんで、最後に作詞だが
「夢⁉話はまだ…」
これも嬉しいことに、出来そうな奴を私は知っている。しかも此処にいる
「な、何故無言で此方を見るのです…う？夢…？」
私が園田のほうを見ていると、高坂と南も理解したのだろうか、全員で園田のほうを見つめた。
ある意味、園田にとってはホラーだろう。
「み、みんなして何ですか⁉」
「そういえばさぁ、海未ちゃんって詩を作るの上手かったよねぇ」
「うんうん、小学校のころ、先生にも誉められてたよねー」
「中学の時にポエムとかも書いてたな」
私達の言葉を受け取って海未の顔がどんどん青ざめていく。
だが、これもアイドル活動の為だ、許せ園田。
「かかれ」
「うわぁぁぁ⁉」

なんだか園田が不憫に見えてきた。
止めないけど。

０１４

おそらく、園田海未の詩を作る才能は私達四人で…下手するとクラスの中で、一番上手いだろう。
次点に南で、高坂は論外である。あいつ、国語大丈夫なのだろうか。国語で赤点云々は聞いてないが、大丈夫なのだろうか（大事なことなので二度言った）。
私は、まぁ可もなく不可もなくといったところである。
それでだが、園田海未が小学生の頃に書いた詩はクラスの中でもとびきり凄まじく、先生すら感心していたほどだ。だから、作詞にしてもこの四人の中なら園田がやったほうがいいのだ。西木野真姫一年生に頼むのも手だが、流石に一年生に任せっきりは先輩としてどうだろうか。
なので
「無理ですぅ!?」
なんて、また言っているこの臆病者を再び説得する。南、任せた

「海未ちゃん、おねがいっ……！」
「うっ…そ、その手は…」
「……海未、ちゃん…」
「海未ちゃん…」
「園田…」
「あぁもう!!またこれですかぁ!?止めて下さいぃ!!」
　はっはー。勝てばいいのだ勝てば。
「うぅ…卑怯です……もう…はい、わかりました、引き受けましょう」
「やったー！」
「さっすが海未ちゃん！」
　えらく聞き分けがいい。これは何かあるな、と早めに予想ついたけども。あえて口にはしない
　その方が楽しいから
「ですが、
　その代わり、これからの練習メニューは私が決めます。それに、朝と晩にそれぞれダンスの練習とは別に練習をします」
「えぇー!?」

まぁ、そんなとこだろう。なんせ、園田から見れば高坂と南は体力がない。園田が練習メニューを考えてくれるなら万々歳だ、そうでなければ私が考える予定だったし。私はしないからいいのだが

「夢は私と一緒に練習メニューの発案と、二人の練習の付き合いです」

関係なくはなかった。

まぁ、その程度なら付き合えるかな。夜は少しキツそうだが、あいつらに比べればマシだろ。付き合えるだけ付き合ってやろう。

さて、これで一応ライブへの問題は大体目処がついた……あ、聞き忘れてることが

「講堂は大丈夫だったのか？」

「あ、そうでしたね。はい、大丈夫です。無事借りれました。一度生徒会長に怪しまれましたが、副会長のおかげでなんとか」

「ふむ、バレなかったのならいい。無事借りれたようだし」

副会長には心の中だけで感謝しておいて。

では、本当に問題はこれで全部解決か。名前も…人任せだが解決した筈だ。

これであとは高坂が説得出来ればｏｋである。本当に任せるぞ、高坂。頼むぞ

「うん、任せて！」

不安もあるが、自信が沸いてくるのは気のせいではないだろう。

なんて高坂だ、あの高坂だ。やるときはやってくれるさ。
私がやるよりかは確率は高い。

『μ’s』

015

会議が終わった次の日の出来事である。

今回は朗報だ、なんと、名前が決まった。

実は、名前を他の生徒に丸投げにするという、高坂の行動には少々なりとも呆れは抱いたが、高坂にしては頑張ったのではないだろうかと思った。音ノ木坂学院のスクールアイドルの名前を音ノ木坂学生が決めるというのも面白いと思うし。

そして、誰がいれたか、はたまた悪戯か。今日、その箱に一枚入っていた、紙。

その中に書かれてあった名は…『μ’s』読みはミューズ、決して石鹸のことではなく。園田曰く、女神のことらしい。大それた名前だと思うが、小さくては駄目なのだから、名前だけでも大きくあればいいんじゃないかな、と。全員一致で賛成の名前だった。

入れてくれた人に賞状でも送ろうか。勿論、全員分のサインと一緒に。

「私、この名前がいい！」

高坂にも好評のようだ。まぁ、これがいいではなく、これしかない、が正しいのだが、

微々たる差である。ありがとう、名も知らぬ人よ

016

三人は交渉と練習へ行った。その間、私はが何をしているかといえば、まぁ、最悪の自体を回避するための布石とでも言っておこう。

あいつらが失敗するとは思えないが、念には念を入れてさらに保険をかけろ。精々、出来ることをするのが吉というものなのだ。私の自論だが。

「そういう訳なんです、協力してくれませんか、矢澤にこ先輩」

「嫌よ」

一蹴されてしまった、難儀なものである。

アイドルと言えばこの人だと思って協力を仰いだのだが…そんなにも嫌なのだろうか、西木野真姫一年生といい、高坂達…もとい、μ´sに協力することはそんなにも反感を買ってしまうのか。

瞬きを三度。

「お願いします。私が気軽にアイドルのこと相談出来るのは矢澤にこ先輩だけなんです」

「いやいや、私とあんたってそこまで面識ないでしょ!?商店街で一度会ったっきりじゃない!?しかも一昨日よ!?」
「それでも貴方のアイドルへの熱意はわかりましたので、その時からアイドルのこと相談するならこの人だなって確信しましたので。繋がりも作っておきましたし」
「うっ…!確かにガラガラの景品貰ったことには感謝してるけども…」
「ならば…」
「でも嫌よ!」
つい一昨日にことである。
何時も通り買い物するため商店街に来た私は、買い物ついでに貰った券で一回だけ、ガラガラを回してみたのだ（正式名称は新井式回転抽選器と言うらしいが）。
そして当たったのが、何処かで見たことあるようなスクールアイドルのグッズ。正直、使い道がないものを当ててしまったと思いながら振り向くと、凄い表情（をしてるであろう）ツインテールの不審者がいたのだった。言わずもがな、この不審者が誰を隠そう矢澤にこ先輩である。
そうして、私は使い道のないグッズを差し上げ、感謝され、今に至るということである。
思えば、当たったのは作戦外のことであったが、何にせよアイドルが好きで同じ学校

の先輩と知り合えたのはラッキーだった。
と、そういう訳で今交渉してるのだが、どうも向こうも頑固である
「何故そこまで拒否するのです?」
「ふん、なんで私が出来たばっかの素人スクールアイドルの手伝いしなきゃいけないわけ?」
成る程、と思った。確かに、アイドルへ並々ならぬ熱意がある彼女にとって、高坂達は手を掛けるほどもない素人グループということか。
…いや、寧ろ…推測の域をでない憶測だが、もしかして先輩は…
「嫉妬してます? いや、これは嫉妬と言うより…」
「だぁー!!もう口開くな!」
「むぐぐ…」
「私はあんなどうせ遊びで始めたんだろう適当な素人が嫌いなだけ!それ以上でも!それ以下でもない!いい!?」
口塞がれてて返事出来ません先輩。
しかしまぁ、ここまで露骨に口を塞がれると私の勘も鈍っていないということか。先輩の過去や先輩の心情なんか私にはわからないが、これだけは言っておきたい
「(口!口!)」

「あ、ごめん」

…危うく口呼吸が出来なくなるところであった。強く押さえすぎである。あ、これが言いたいわけではない

「今度のライブ、見に来てください。それで彼女達を見てください。結論付けるのは、それからでも遅くはないでしょう」

「…ふん、誰が見に行くもんですか」

口ではこう言っているが、多分だけどこの人は来ると思う。この人ほどアイドルに一直線で向かいあえる音ノ木坂学生を私はまだこの人しか知らない。

「あと、別に私はアイドル好きなら誰でもいいってわけではないですよ。矢澤にこ先輩だから声を掛けたんです。貴方なら、彼女達に声をぶつけることが出来そうでしたから」

「あ、そ」

そう言って、先輩はそっぽを向いてしまった。やれやれ、である。私も大人しくこの部屋から出るか。礼をして、扉を開けて、部屋を出る。

次こそは、スカウトを成功させたいものだ。

０１７

「ガンバレーガンバレー」
「夢ちゃんっ、応援が！棒読みだよぉ…」
そのまた次の日の早朝訓練。
高坂が寝坊せずに来ただけでも驚いてたが、あの園田が出したメニューも全部こなすということにも驚いた。驚いてばかりで何もしてないので、精々とばかりに応援の言葉を投げかけている。私だ
「ふぇぇ…夢ちゃんからやる気を感じないよぉー」
失敬な、頑張って応援してるぞ。誠意を感じないのは気のせいだ、そうに決まっている。
ところで、私達が今ここで練習しているこの場所は神田神社というのだが、その前にある石段の階段。紛れもなくそこで登り降りの往復練習をしているのだが、この階段の名前、『男坂』という。なんとも青春を謳歌する少女が登る名前ではないと思う。
私はまず登れないから、神社へ行くなら遠回りをするのだが。それも面倒なので上から降りてくる二人に下から声援を送っているのである。というわけで
「ガンバレ、ガンバレ」
「せめてっ、何か音を！」

「ファイトだよ！」

「音ついてる筈なのにファイトしてないいい…！」

ほれほれー、さっさと登れー、これも青春のためだー。あ、ラストって言い忘れてた。

…まぁ、いいか。どうせ園田が言うだろ。

じゃあ、もうそろそろ登るか、遠回りで…

「キャアー!!!」

…何だ、今の声は。随分聞き覚えあるけど何だ。喧しいぞ、朝だぞ。近所迷惑だよ。

出来る限り批判してみたので、正体を確かめにいくとする。どうせ行き道だしな

「……やない？」

「……」

そこにいたのは、西木野真姫一年生と何故か巫女服着た副会長であった。

一体なんの話をしていたのか、副会長が去ってしまったので真意はわからない。西木野真姫一年生も行ってしまって、事実真実がわからなくなってしまった。もっと言うなら、副会長の人柄がわからない以上、どんな会話をしていたのか予測するのも不可能に近い。

自分達に利益のある話をしてくれてたらいいな、とか思っちゃたりしながら。そんな訳ないよなー、と内心否定しながら、私は笑って高坂達のところへ向かったのだが。

次の日のことであった。

０１８

「夢ちゃん！曲だよ！曲が出来てるよ！」

そう、僅か次の日のことであった。

今朝高坂の家にあった音楽プレイヤー、μ´s様へと書かれたその音楽プレイヤーには、確かに曲があった。園田が頭を捻って考えた歌詞に、曲がついていた。それを作って、歌ったであろう人物は間違いなく彼女であろう。

その綺麗な歌声と美しいピアノ伴奏で出来たその曲は、紛れもなく私達…μ´sの曲だった。その事実に、もう、色々頭の中にあった疑問は綺麗さっぱり消えたのだった。

「……これでライブが出来るぞ…！」

「やっ…たぁ!!」

「うん！」

「はい！」

ライブが出来る、ということへの希望のほうが、どんな感情よりも勝っていたからだ。

『なんて、もう必要ないかもしれないけれど。』

０１９

曲が出来た、曲が出来たぁ、わーしょっいわーしょっい。なんて２日ほど高坂がはしゃいで煩かったのも、もうわりと前の話だ。もうすぐアレだ、初ライブだ。新入生歓迎会で我らがμ’ｓが歌って踊ってライブするのだ。西木野真姫一年生に曲を作ってもらい、南が衣装を作って、歌詞を園田が考え、振り付けをみんなで考えた。やっとここまで来たのだ、短くもあったが、長かくもあった。

もう、新入生歓迎会は明日である

「ことり！」

「うん！」

あいつらは、神社の前で朝練だ。

今思えば高坂は一度もこの朝練を休まなかった。あの寝ぼすけの高坂がである。それほど、ライブに気合いを入れているのだろう。

南も、なんだかんだ言って園田も。

全員がこの初ライブにかけている、かくいう私もこのライブは期待しているのだが。だが、最悪の可能性もなきにしもあらず、それを気にしていては始まらないとはわかっているが、心配したくなってしまう。

そして、それを、防ぐのは私の役目である。踊れない私が出来ること。

「そろそろ私は先に行くよ」

「あ、うん！また学校でねー！」

「お疲れ様です」

「またねー」

さて、早いうちに手は打っておく。どうしようもない結果だけは御免である。そんな未来、おそらく誰も望んではいないだろうから。

０２０

「頼んだ」

「わかった。誰でもない、あの千里川の頼みだ、無下にはしないよ」

「助かる」

そう言って、私は手を振ってクラスメイトを見送る。

まぁ、何をしているかと言えば、色々と手を打っているのだ。
気にするほどでもないことだが、気にするべきことなのだ。
よって、私は愛すべき幼馴染みのためにこうやって動き回っているのである。実際に動いているのは車椅子だが。
「あらかた二年は回ったかな」
園田達が無駄に早く朝練を開始するので、それが終わるより早く登校する私はもっと時間に余裕がある。だから、こうやって無駄に早く学校に登校し色々している生徒に声をかけているわけだ。二年生の教室三クラスは大体回った。が、流石に一年三年生の教室にまで行くには私に度胸がない。
で、そろそろあいつらが登校する時間を見計らって……あっ。今とても重要なことを思い出した。

０２１

「……人…前…？」
「そうだ」

「あ」
「そういえば」
もしや、とは思っていたが。こいつら、どうやらライブの準備で頭一杯で肝心なことを忘れていたようである。
人前、人の前。簡単に言えば、見られる。特に園田なんかには由々しき問題であろう。
「人前って…人の前という…」
「だからそうだって」
園田は時々、自分に都合の悪い話を聞こうとしない癖がある。臆病者たる所以か、はたまた性分なのか。だが、これはどうしても聞いてもらわないといけない問題である
「客がお前達のライブを見に来た場合、お前達は人前で歌って踊って笑顔を浮かべるんだぞ。いまさらだが、それが出来るか？」
本当に今更だが、これが出来ないと論外である。まさか客が入らない、なんて想定してるわけではあるまい。少なくともってか、ほぼってか、客に見せることを想定するなら、避けては通れないことである。
高坂は…まぁ、大丈夫なんじゃなかろうか。小さい時から劇とか率先してやる奴だったし、人並み以上には人前に慣れている筈だ。和菓子屋の看板娘だし。
南、は…ちょっと判断しづらい。あいつが人前に出るところはあまり見たことないし

…いざという時はやる奴だし、わりといけるのではないだろうか。いや、アレを考えればむしろ得意分野かもしれない。

だが、大問題がこいつである。園田海未、こいつがどうにかならないとどうしようもない。それはおそらく、私達共通の見解だろう。

「は…あはは…」

あぁ、園田から途端に生気が失われていく…

「う、海未ちゃん！えーと…そうだ！人を野菜だと思うんだよ！」

「野菜…」

確かにその方法はわりと有名だが、よく考えてほしい、自分の前で各々に跳び跳ねる人並みの大きさの野菜達を…不気味だ。

私なら失神する。

「あー!?海未ちゃんが倒れたー!?」

「だろうな…」

不気味過ぎて頭がどうにかなりそうだ、その光景。

「無理ですぅ!?野菜とか無理ですぅ!?」

「違うよ海未ちゃん!?お客様だって！」

「はっ!?…そ、そうですね、野菜が動くなんて……人でも無理ですぅ!!?」

「海未ちゃあーん!!?」
　駄目だこりゃ。何か別の案を出さなければ。
「何かいい案ないか？南」
「うーん…海未ちゃんの性格は昔からだし…」
「だよなぁ…」
　いっそのこと、目を瞑ってとか。
　言ってなんだが、すまない、忘れてくれ
「期待はしてないけれど、高坂は何か案はないか？」
「むぅ！何で私は期待されてないのー！」
「当たりはデカイけどハズレも大きいからだよ、わかったか」
「納得出来ないけど……私は、馴れちゃえばいいんじゃない？と思います！」
　それが出来ていれば元から苦労せんのだが。まぁ、やらないよりはマシではないだろうか、方法にもよるが。
「具体的には？」
「これを配ります！」
　そう言って高坂から手渡されたのは、初ライブのお知らせチラシ。これを道行く人に渡すのだという。

なるほど、高坂にしてはいい案だ。宣伝も兼ねて上手く行けば、という。これで園田の臆病が解決出来るかどうかは別にしても、宣伝も出来るのは良いことだ。
「で？どこで配るんだ？」
「それももう考えてます！」
高坂にしては話が早い。いいじゃないか、それでいこう
「行くぞ園田。珍しく高坂がよさそうな案を出したんだ、お前の為だぞ歩け」
「な、何が始まるんですか!?」
大惨事…いや、何でもない。というか、話聞いてなかったのか。耳塞いでたけどさ。

０２２

という訳でやってきたのは我が音ノ木坂学院の校門前。
高坂はここでチラシ配って人前を馴れようという。確かに、人前に馴れるなら人と接するのが手っ取り早い。当たり前のことだ。
それに、学園内なら私もある程度動けるし。これなら園田の奴も…
「……ここで、ですか…？」
「うん！こうやって道行く人にチラシを配れば、人前に出ることだって馴れるよ！」

「だからって…」

少し駄目そうではあったが、学園内というのもあるのか、少しは落ち着いている。これならまだ一応は大丈夫そうである。これは、もしかして本当に高坂の発想の勝利か？

「それじゃ、張り切っていってみよー！」

「おー！」

「お、お…」

「オー」

ちなみにだが、今更言っても仕方ないことだが、学園内ということは、あの生徒会長さんの目に入る可能性があるということだが…まぁ、万が一歓迎会に行く人がいれば儲けものだし。それに、どうせ外で配ったって新入生歓迎会に来る人なんてそうそうどころか、全然いないだろう。なら、生徒会長さんによる何かがある可能性があるとしても、学園内で配るほうがいいとは思う。

それに、私達ライブの告知って貼り紙以外なら口コミしかしてないし。本当にライブするつもりだったのか怪しいな…私もだけど。

「よろしくお願いしまーす！」

「お願いしまぁーす」

「お、おね…お願い……あっ」

あの二人は流石に元気いいが、園田は駄目だな。これは本当にライブなんて出来るのだろうか。してもらわないと困るんだが

「夢ちゃんも配ってよー！」

はいはいと、精々配らせてもらいますよ……って、車椅子座ってるのにライブの宣伝って…説得力ねーなこれは。

０２３

「配ったねー」

「園田は余りに余っとったけどな」

「そう簡単にいきませんよ！それに、そういう夢こそ全部配れてなかったじゃないですか！」

「お前…私の足見て言ってみろ、私が声掛ける距離に行く前にみんな歩いていくんだぞ…わりと寂しいぞ…」

「あー、海未ちゃん夢ちゃんを泣かせたー」

「え、えぇ!?あ！す、すいません夢！」

…現在は辺りが暗くなったころ、高坂の家だ。

前にも来たが、小さい頃から此処にはよく集まったものだ、時々お菓子貰えたりするので、子供には嬉しいのであった。え？泣いてる？ははは、そんなわけあるはずないだろう？この私がだ。園田があたふたしながら謝ってくるのを楽しんでるだけさ……ぐすっ

「い、いや、いいさ。二階まで登らせてもらったのでチャラにしよう…」

「すいません…なんか」

泣いてないんだぞっ！なんて、可愛く言っても黙れこの野郎と罵倒を受けかねないので、そろそろ自重する。

では、何度も言うが、基本的私は足がこうなので、高坂の部屋、つまり二階まで行けないので、もっぱら一階の和室にお邪魔するのだが、時々園田とかに肩を貸してもらって二階へ上がるときがある。ありがたい。やっぱり年頃の女の子なんだから、お喋りぐらい部屋でしたいじゃないか。私だって女の子だ。

「でもさぁ、はっきり来てくれるって言ってくれたの、あの小泉花陽ちゃんだけなんだよねー…」

これはチラシ配りの話。

チラシを配っている最中、一人の眼鏡一年生が熱心な顔でライブ行きますと言ってくれたのだ。これで私達のやる気がさらにうなぎ登りだった。

そして、後々の調べで、彼女の名前は小泉花陽一年生だということがはっきりした（私調べ）。見た感じバストは８０以上ありそうだったが、最近の子は発育が実に宜しい。なんて、おっさんか！と、自分で内心つっこむ。はい、滑りました、忘れて下さい。

……なんだか、最近の私の内心は、荒ぶっている気がするのだが…気のせいだろうか。

「あの一年生には心から感謝するとして、一人でもいたことをありがたいと思え、０と１は違うんだよ」

「わかってるよー」

それに、日本人はとてもシャイなのだ、自分から行きます！なんて言い出すほうが少ないと私は思う。

「それじゃ、本日のメインイベント！衣装の発表に移りたいと思います！」

わー、と観客は僅か三人であるが。

そもそもこれの前に何もしてないだろうが、と色々言いたいが、そこは水を差すのも野暮である。大人しく眺めているとする。

「では！ことりちゃんどーぞ！」

「うん！……じゃじゃーん！」

今の間は衣装を取り出してた間だ、他に何もないぞ。

そして、カバンから布を取りだし、それを広げてピンクを基調とした衣装を私達に見

せる。うん、可愛いんじゃないかな。私はいいと思う

「可愛い！」

高坂にも好評だが、あることを私は忘れていない。さぁ、園田のほうを向いてみるのだ

「ことり…？このスカートは？」

「え？……あっ」

どうやら思い出したようである。そうだ、園田は南が衣装の案を出したその時から、スカートへの交渉を行っていた。不毛だとは私ですら思うが、園田にとっては死活問題だという。

万年ロングスカートの私が言ってもどうかと思うけど。

「ことり!!言いましたよね!!?スカートは膝より下と！」

「あはは…忘れちゃってた」

「海未ちゃーん…もう作っちゃったんだしさー」

「その手は卑怯です！」

「気にするからそうなるんだ、気にしなければいいんだ」

「それが出来たら苦労しませんし、万年ロングスカートの夢に言われたくないです」

やはりロングスカートの私が言っても駄目だな。…でも、車椅子でミニスカートは

ちょっと…

「それなら私は一人だけ制服で踊ります。そもそもスクールアイドルなんですから、此方のほうが正しいでしょう」

「ええ!?!!折角作ったのにぃ!」

いや、学校の制服もわりとミニスカートだし、まぁ膝よりは下だが。それに、一人だけ制服とか、そっちのほうが目立つと思うのだが、そのことわかってるのだろうか。多分わかってない

「お願い海未ちゃん!」

「う…でも、やっぱり短いのは…」

「園田」

このままでは話が停滞してしまうので、しょうがない。私から少し助言を、精々な助言を。それくらいならしても許してくれるはずだ、誰が、とかではなく。

「夢…?」

「園田、お前がどう思ってかはわからないが、私達三人は、お前と最高のステージをしたいと思ってるんだぞ?それなら、衣装だって最高の物を用意するのが、いいと私は思うのだが」

「そうだよ!私も、最初はどうかと思ってたけど、今は違うよ。今は、穂乃果ちゃんと海

未ちゃんと、一緒に踊りたい」
「うん、海未ちゃんとことりちゃん…夢ちゃんとも！皆でここまでやってきたんだ、折角なら！最高のライブにしたい！」
「そうだ、全員でここまでやってきたんだ。どうせなら、全員が全員、やってきてよかった！って思いたいじゃないか」
　これは私の数少ない心からの本心である。私だって幼馴染み達とやり遂げたい、成し遂げたい。わかるだろう？お前だってそうなんだから、園田。
「……」
　長い沈黙。園田はこんな風に黙っているが、次に言う言葉はおそらくあれだ。わかるんだよ、わかってしまうんだよ、理解してしまうんだ、長年一緒にいたら。
「…はぁ、わかりましたよ…仕方ないですね…そうですよ、私だってやり遂げたいですよ…」
　ほら、やっぱり私達って仲良し幼馴染みだろ？
「…ありがとぉ！海未ちゃーん！大好き！」
　こんな元気一杯なやつに振り回されてるんだからさ。少しぐらい考えが似てても文句言われないさ。

０２４

ラストは短いが、やるべきことがある、やらなきゃいけないことだ。０２４番、許してくれ

「ライブが、成功…いや、大成功しますよーに!!」

私達の練習を見守ってくれていた神田神社にお参り。

賽銭を入れ、礼と拍手と、目指すは大成功、お願いします神様、どうかこの三人にほんの少しの勇気を…なんて、もう必要ないかもしれないけれど。

『言ってあげようぜ?おめでとうって』

０２５

今思っても変な話である。踊れもしないのに、アイドルのグループに入っている。踊ることが出来ないのに、である。

踊らないアイドルなんてものもいるらしいが、踊って歌える、なんて風にも言うように、歌だけではなく踊りもいれて人々を魅了するのがアイドルなのである。そうなのである。

歌いたいなら歌手になれ、踊りたいならダンサーに、両方ならアイドル…アイドルの場違い感が凄いが、けれども、私はスクールアイドルなんてものをやっている。直接は何もしていないが、グループに入れられている。

何度考えても不思議な話だ。高坂に引っ張られて、勝手な内にグループ入りだ、迷惑な話もあったもんである。

けど、断らなかったのは、あいつがやり遂げる奴だとわかっていたからなのかもしれないのだった。そう、思うのだ。

「なぁ、本当に不思議だとは思わないか」
「…」
「未来予知なんて私が一番信じてない癖に、高坂が言ったときには確信したんだ、こいつはやるって。」
「……それを私に言ってどうするつもりなんですか？」
「なに、高校生の独り言と思って聞き流してくれていい。本題はこっちだ、感謝の言葉を言いにきたんだ」
「…私、先輩に感謝の言葉言われるようなことしました？した覚えありませんし、したとしても当てがありません」
「そんなことを言うってことは、何か心当たりでも？」
「ありません！」
　顔を赤くして大きな声で否定。
　まぁ、予想の範囲内だが。彼女のようなプライドが高い人間は、そういう風にでもしないと、素直に人を助けるも出来ないようだ。全く、このツンデレめ。いや、照れ隠し？いいや、ツンデレだ。違いない。
「まぁ、それでいいならいいんだが。一言だけ言っておくよ、ありがとう、感謝する。西木野真姫一年…いや、西木野さん。ライブも来てくれると嬉しい」

「だから私は何もしてないって…勝手なこと言わないで下さい」
「ははは、すまないな。ライブ待ってるよ、またね」
「誰が行くって…」
ツンデレさんは素直じゃないなー
にこ先輩みたいである。あの人は本当に照れ隠しだけど。しかし、それでも、曲を作ってくれたということは、そういうことである。期待して待つとしよう。

０２６

時刻は夕方手前だろうか、もうすぐ日が沈み始めるだろう。場所は楽屋のような裏場所、三人が着替え中である。
「うわぁ!やっぱり可愛い!」
「えへへ♪頑張った甲斐があったよ」
高坂はピンク、南は緑。ヒラヒラとした可愛い服である。似合ってるなぁ、と素直に思う。それぞれが似合う色を着て…ちなみに、園田はまだ着替えてる、試着室の中で。
「海未ちゃんまだー?」
『ちょ、ちょっと待って下さいっ!!』

着替えに時間が掛かりすぎというか、多分、衣装を恥ずかしがって遅くなっているのではないだろうか。しかし、それにしても…女しかいないんだが、ここ。どれだけ恥ずかしいのか。同性同士でこれなら、異性ならどうなってしまうのか、今から園田の将来が心配である

「…ど、どうでしょうか…」

「わぁぁ…あ、あ?」

「あ、あれ?」

……ようやく出てきたと思ったらこれである、いい加減しろ、と声を大にして言いたい。

おい、いい加減にしろ!

「なんでジャージ着てるんだよっ!!」

声に出てしまった。

「ええ?だ、だって!恥ずかしいじゃないですか!!」

私は思わず天井を仰いだ。呆れているのだ

こいつは…本当にもうでしょう!

「もういい!二人ともやるぞ!脱がせ!」

「あいあいさー!」

「了解でーす♪」
「え!?い、いやぁぁ!!?」
さぁー脱がせー!!あ、服にまで手はかけないでいいぞー、その生意気なジャージを脱がしてしまえー!
なんだか、図らずもいたいけな女の子を苛める糞女みたいな構図になってしまった。
「いや、いやぁぁ…ちょ、なんで服に手をかけてるんですかぁ!?」
強いて言うならお前が暴れるからだー。いやぁ、園田の胸は相変わらずだなー
と、さりげに園田の胸を揉み始める私。
変態暴漢女になる私。
「胸に関して夢に言われたくないですっ!あとなんで目標変わってるんですかぁ!!?」
冗談だ、さっさと脱がすに限る、やっぱり。
「もう嫌ですぅ!!?」

０２７

私は今、外にいる。あいつらは、幕の後ろにでもいるのではないだろうか。なんだか予想に反して悪いが、あくまで、私は客としてあいつらのライブを見るつもりでいる。

だからこうやって、客席の入り口の前にいる。公演まで待っている

『μ’ｓ初ライブ、ご観覧の方は早々に入場して下さい』

もうすぐ、である。

しかし、周りに人の姿はない。

いるのは私だけ、周りに客は、いない。

……予想していた最悪の状況であった。

客が来ない、いない、入ってこない。

それを回避するため、私は動き回っていたのだが、やはり少々難しいらしい。もう少し時間がかかりそうだ。なんせ、相手の都合もある。

「そして、小泉花陽一年生も来ていない…と」

もしかしたら、と思ったが、やはり来ていない。あの見るからに食べるのが好きそうな一年生は来ていない。残念だ、あの一年生は抱き心地がよさそうだったが…来てないなら仕方ない…か。

『ライブ、もうじき開演です』

西木野真姫一年生も、矢澤にこ先輩も来ていない。まぁ、仕方ないとはいえ、この人達も来るには時間がかかるだろう。ツンデレだもの、許してやってほしい。

誰も来ない、初のライブ。

そんなの、あいつらがどう思うなんてわかってる癖に。たとえ、あいつらが自分で立ち上がれるとしても、それは別の世界の話。

私がいるなら、私が行ってやるしかないじゃないか

「精々、あいつらをガッカリさせないように」

あぁ、世話の掛かる幼馴染み達である。……私もその一人か。難儀なものである。

０２８

『現実はそんなに甘くない…』

入った時には、涙目になってマイナスな言葉ばかりを呟く三人の幼馴染みがいた。見渡しても人影はない。

当たり前だ。

挫けそうになっているのは予想していたけれど、投げ出しそうになってるとは思っていたけれど、まさかここまでとは思わなかった。

……そうだけど、そうなんだけど…私は…私は、お前のそんな泣き言聞きたくない。

「馬鹿言ってんじゃねーよ…」

お前が諦めるわけか、ここまでやって、客がいないから。

ふざけるな、高坂穂乃果。私はそんなお前についてきたんじゃない

「…こーさかーッ!!!」

人生二度も出したかどうか定かではない程の声で、私は叫んだ。今にも泣きそうな幼馴染みへ向かって

『夢……ちゃん……』

「諦めるのか！お前が!!此処までやってきてッ!!ようやく行き着いたのに!!これがお前のやりたいことじゃなかったのかぁ!!」

やめろよな、私まで泣けてくるだろ。お前らがこんなんだと、私まで悲しくなってくるんだよ。だからやめろよ。お前は、最悪を最高にできる奴だろ。こんなところで、やめていいわけあるか…!!

「もう一回叫んでみろ!!高坂!!南!!園田!!『よろしくお願いします』って、叫んでみろ!!」

やれよ

お前達のその声は

きっと届いて奇跡を起こす筈だ

『……うん!!』

…どうやら私の声は届いたようだった。

やれやれ、全く世話のかかる幼馴染みだ。

だけどそんなお前らが、私は大好きだぜ。
『ことりちゃん!・海未ちゃん!』
『…うん!』
『…はい!』
あいつら三人は、輝いている、輝こうとしている。
まるで神様にでも選ばれたのか。いや、あいつら自身が神様なのかもしれない、女神という、美しい神様なのかもしれない
『μ’ｓ初ライブ!!よろしくお願いします!!!』
三人がそう言った。それと同時に聞こえる足音。
ほらな、あいつらの声が聞こえたんだ
「はぁ…はぁ…あ、あれ?ライブは?」
少なくとも、後輩一人には届いたようだ
「安心しろ、小泉花陽一年生。今からだよ、君はμ’ｓ一番最初の客だ」
私は、三人に合図を送る。『存分に見せてやれ』と。自分でもビックリな程優しい声で
『やろう!この日のために、やってきたんだから!!』
――そして始まる、最初のライブ、始まりのライブ。
後の私は、きっとこう言うことであろう、『あれは凄かったよ』と、当たり障りない、

そんな点数も付けられないセリフを、真顔で言うだろう。
だって、特別な言葉をつけるまでもなく、彼女らは輝いていたのだから。
『Ｉ　ｓａｙ…』
そしてどうやら、私の手回しも間に合ったようである。
「もう始まってる！ごめん千里川！」
「いや、いいよ。その代わり、存分に彼女らを見ていってくれ」
「あぁ。早く入って、みんな」
説明しておくと、私が手回ししたのは、運動部の部長達。そっちの部活動紹介が終わり次第、ライブを見に来てくれと、なるべく部員の方々の一緒にと。二年と三年、全ての教室に回って言い回った。随分と、時間はかかったが、上手くいったようで安心した。
『明日よ変われ！』
『希望に変われ！』
あぁ、変わった、変わっただろう。
お前達も、私も、希望への第一歩。
『眩しい光に、照らされて変われ…』
お前達の物語は、まだ始まったばかりなんだ。最初ぐらい、羽目外しても怒られない筈さ、私が保証する

『ＳＴＡＲＴ!!!』
「…あぁ、今まさにスタートした」
入った人数、おおよそ２０人弱。
多いか少ないかは、みんなの感性に任せるとして、少なくとも、私とっては成功だった、あのライブは。
だって、見ていた全員が、三人の女神を見ることに集中してたんだ、成功と言わずしてなんだろうか。意地悪言わず、素直にここは言ってあげようぜ?
おめでとうって。

『入らせます、絶対に』

０２９

アルパカ。鯨偶蹄目有蹄類ラクダ科の哺乳類。学名はＶｉｃｕｇｎａ　ｐａｃｏｓ。なんていうのは、かのウィキ教授からの引用である。間違っても私の知識では精々、ラクダの仲間で哺乳類、が限界だろう。

そして、そんなアルパカだけど、実は私にとってはかなりご近所さん的存在だろう。だって、うちの学校は、アルパカ飼ってるんだもの。

私は最初の学校案内でこれを見たとき、一瞬動きが止まった。可愛いー、なんて声が聞こえたが、私はアルパカを飼っている学校の謎に一瞬動きを止めたのである。もしかしたら、今時の高校はアルパカを飼うのがステータスなのかもしれない。私の視野が狭いだけで、他の学校でもアルパカは育てるのかもしれない、一応家畜生物らしいし。と、なると、最近人気のこの付近に出来たあの高校もアルパカを……あ、この学校古いじゃん。でも古いからってアルパカを飼うの？それとも目新しさでも求めてアルパカを飼い始めたのか、そこのところどうなのか。謎である。

しかし、アルパカアルパカって文にするとゲシュタルト崩壊を起こしてしまいそうになるので、そろそろこの話も打ち止めだ。

そして、なんでこんな話を私がしているか、である。まぁ、目の前で幼馴染みが熱い眼差しでアルパカを見詰めているからであるのだが。

ちなみに、南のことだ。

「はぁ～…」

あの様子を見るに余程ご熱心のようだ。…そういえば、この学校の理事長は今あそこでアルパカに戯れている幼馴染みの母親なのだが…まさかな。

「ことりちゃん！」

「あとちょっと～…」

部員を探しに来たのにこれでは進まない、どうにかせねばならないのだが……

「…」

「…フゥ」

…ふと、茶色い方のアルパカと目が合った。相手の毛で目が隠れているのに目が合うとは何事かと思うが、視線でわかる。今、私とあいつの視線は交差していると…ところでだが、ほぼほぼ関係ないことだが。

「…お前、メスなのか」

「…フフゥ」

ってことは白いほうがオスなのか…

いや、人?は見掛けによらないと言うし。それは彼女らとて同じことであろう、私が関与してツッコンでいい話ではない。触れなくていい話もある。

「その、なんだ。頑張れよ」

「フゥゥ」

ところでアルパカの鳴き声ってあんなのなのか?書いてる奴がわかってないみたいだけど。不思議だ……あ、南が迎撃された

「大丈夫か?」

「うん…平気」

「まさか攻撃してくるとは…!」

「え?あれ攻撃なのか?」

だとすればとんだ技である。『なめまわし』とか『したでなめる』とかそこらへんの類に違いない。

ヤベェ、考えてて何だか恐ろしくなってきたぞ…!

「あの…そうじゃなくて…そのぅ、遊んでた、だけ…みたいですから…」

遊んでたのか…こいつ。

「…」

……何も喋らんが確かに風格があるな…　白いアルパカ…こいつならとんでもなく渋い声で『俺』とか言っても不自然なさそうだな。

「私は何いってるんだ」

考えてわけわかんなくなってきた。

「ちょっと最近変ですよ?夢。一人言多くなりました?」

「お前らのせいでストレスがマッハなんだよ」

いやしかし、園田にもつっこまれてしまうとなるとそろそろヤバい。一人言も自重せねば。

……ん?そういえば、今さっきアルパカを説明してくれた人物…何やら覚えが…

「小泉花陽ちゃん!」

そうだ、あの小泉花陽一年生だ。何故こんなアルパカとアルパカしか居ないところに。

「あの…飼育委員、ですので…私…」

そうだったのか。

アルパカを飼育しているのが彼女ならば、はたして自分から立候補したのか推薦か、はたまたジャンケンに負けたとかなのか。それは定かではないが、飼育委員としてアル

パカを世話している内の一人なのだろう。
…しかし、アルパカの気持ちを一瞬で汲み取る辺り、自分からでもたまたまでも、アルパカ飼育は随分とやっているらしいと思えた。
「ところで花陽ちゃん、改めてなんだけど…アイドルしませんか!?」
おっと先に言われてしまった。
何だか高坂の言葉は少し順序を飛ばした感はあったが、小泉花陽一年生のアイドルへの期待の気持ちはあのライブへの集中具合からよくわかるものであった。
だから、もし勧誘するなら彼女を…と私は思っていたのである。高坂が誘ったからもういいけど…しかし、多分、それとなく流してやんわり断ると予想する。
「私なんか…それより、西木野さんがいいと…思います。歌も…凄い上手でしたし…」
「真姫ちゃん!花陽ちゃんもそう思う?歌すっごく上手だよね!だから誘ったんだけど…断られちゃって」
「そ、そうですか…す、すいません。私何も知らないのに…」
「ううん、大丈夫だよ。それより!何時でもいいからね!興味があるなら…」
ん、向こうから声がする。聞こえ的には、おそらく小泉花陽一年生を呼んでいるのだと思われる。
「あ、凛ちゃん!す、すいません…次体育ですので…」

「あ、うん…またね」
小泉花陽一年生が離れ、ペコリと少し遠目に見える、おそらく凛ちゃん、と呼ばれた一年生らしき人物が頭を下げ、二人揃って離れて行った。
はてさて、またも少し難儀なことである。たださえ人が少ないのに、今からアイドルなんてやってくれる人物は少ないだろう。だからこそ小泉花陽一年生のような人物が希望の光だったのだが…見た感じアイドルをやるということに否定的な感じではなかったような気もするのだが…難儀だ。
瞬きを一つ。
「どうしましょうか…」
「あと一人でも入れば部に出来るんだけどなー」
私をいれてもらっても困るのだがな。という台詞を、空気を読んで私は口にはしなかった。

０３０

「やっぱり入ってくれないですか？矢澤にこ先輩」
「嫌よ」

このやり取りも数えて四回目である。

ライブが終わった後から猛アピールを仕掛けているのだが、一向に振り向いてくれない。意外と硬派なのかもしれない。それとも私が口説き下手なのか。

「ライブも見に来てたのに?」

「うっ…その話題は止めなさいって言ったでしょ……ふ、ふん!ただの気紛れよ!き、ま、ぐ、れ!普通だったらあんな三流以下のアイドルなんて見に行かないんだから!」

矢澤にこ先輩はライブに来ていた。

席の裏側から隠れるようにライブを見ていた。

おそらくは、それで隠れてるつもりだったのだろうが（それにしてはバレバレだったが）私に見つかった時の先輩の顔といったら、羞恥心と屈辱に満ちた表情だったとやけに記憶に残った。

閑話休題

と、にこ先輩と数回対話した自分としては、にこ先輩はやはりツンデレというより照れ隠しのように見える。というかツンデレはやっぱり、西木野真姫一年生だ。

「というかさらっと此処に居座ってるけど、あんた最近此処に来すぎ!」

「そうでしょうか」

「その上茶までしばいていくとか、図々しいにも程があるわよ!?」

このインスタントのお茶、意外に美味しいんだよ。と、にこ先輩の勧誘のおまけについてきたら嬉しい程の価値はあると思う。
「それに！ライブに来てた人物なら他にもいたでしょ!?なんで私だけなのよ！」
「あ、いえ、目ぼしい人達は大体他の部活に入ってますので」
「私はあまりかいっ!!」
お、ナイスツッコミである。流石アイドルを目指すことはある、バラエティへの出演も想定済みということか。これは試してみたくなる。
「いえいえ、余りとはいえ、にこ先輩には敬意を持って接しております。そう、例えるなら、のび太君と同じくらいに」
「私は駄目人間って、遠回しに言いたいわけ!?」
「そんなわけないじゃないですかー、にこ先輩。のび太君は寧ろ、覚悟を決めた時は素晴らしく格好いいじゃないですか、そういうところを、私はにこ先輩と投影してるわけです」
「そ、そうね……って、よく考えたら、それってつまり普段は敬意持ってないってことじゃない!?私に敬意どころか軽易しか持ってないじゃないのよ！」
「つまりにこ先輩は軽い女ってことですか」
「人をどさくさに紛れて貶すんじゃないわよ!?それに！軽易から軽いを連想させて言っ

てるのはあんたの方じゃないのよ！」
「そんな！にこ先輩は軽いは軽いでも、器は大きいじゃないですか！」
「軽いって認めてるし、それじゃ中身すっからかんじゃないのよ！私！」
流石と言わざる得ない、にこ先輩のツッコミは素晴らしい。久々に楽しんでしまった。柄にもなく、楽しんでしまったぜ。
仕方ないな、こんなボケツッコミが出来たのなんか久々だったんだもの。
でもまぁ—流石に冗談だ。
「まぁ、冗談です、流石に。本当は、一番アイドルを本気で取り組んでくれそうだから、というのがあります。アイドル研究部、なんて名乗ってるんですから、アイドルもやりましょうよ、と」
「……ふん。やらないって言ったらやらない。むしろ潰してやりたいわ、あんな奴ら」
「…そうですか」
そこまで言われてはどうしようもない、今は大人しく帰るとしよう。
でも、しかし、これだけは言っておかなくてはならない。言わなくては、ならない。
「何時か絶対入ってもらいます。いえ、貴方は入る。断言します」
「…なによ急に……ふんっ」
そうだ、貴方には入ってもらわないといけない。貴方がいないと、彼女達は次のス

テップへ行けない。だから、入らせます、絶対に。

これだけは、確信を持って言える。私が、自信を持って言えることだった。

『テレビの録画忘れた…』

０３１

とんでもなくどうでもいい話にしよう。

私はテレビが好きなのだ。

何をどうしたらそんな話に、と言われそうだが、このままだと私は趣味が一つもないつまらない女と言われそうだったので、一つ言ってみることにした。

というか、私は基本的にテレビっ子だ。暇ならテレビ見るし、録画忘れてたら自分に腹が立つし、野球などの延長で録画を失敗したらガッカリする。バラエティもより選んで見るし、時々だけどアニメも見る。つまり、だ、何が言いたいのかというと、スクールアイドルって思ってたより凄いんだな、と。

「あの熱狂具合から見て中々の知名度だと思っていたが…」

テレビに映っているのは、我が学校の数駅先に出来たデカイビルのような学校。

名前は、ＵＴＸ学院。

なんと洒落た名前だろう。名前のセンスに脱帽である。

そしてこのテレビ番組では、そのＵＴＸを中心にスクールアイドルの特集が放送されている。

リポーターが学校の先生とか生徒とかに話を聞いたりして、番組はそれをネタにしてへぇー、とか言ったりしている。

まぁそもそも、こんなデカイ学校なんだから取材のオファーの一つや二つぐらいは来てるだろうとは思ってはいたが。むしろ今までのＴＶで見なかったのが不思議なぐらい（穂乃果曰く、『よくわかんないんだけど、それもなんか戦略らしいよ』らしいが）。

そして、その話の節々に出てくるある単語は、私の耳によく入る単語だった。

「Ａ―ＲＩＳＥね…」

今一番注目され、爆発的に人気を上げているスクールアイドル、だったはずだ。

綺羅ツバサ、統堂英玲奈、優木アンジュの三人からなるグループで、そのダンス、歌、容姿のレベルはいずれも既存のプロアイドルと比べても遜色ないとも言われている三人だった筈だ、噂の限りでは。

あくまで、噂の限りでは。

そんな彼女らに憧れてデカイ学校、つまりＵＴＸ学院へ入学する子も少なくないという。（それゆえ生徒数取られてるとも言うか、前も言ったけど、それだけじゃないんだけども）

「しかしまぁ、見てると天と地の差だな」
高坂、南、園田。
綺羅ツバサ、統堂英玲奈、優木アンジェ。
同じ三人のグループ同士でありながら、どうしてこうも違うのか。
勿論、経験、実績、とかもあるだろうけど、もっと、根本的に、何かが違う。曲とか、容姿とかそんなのではなく、もっとこう…根本的な…
「夢ー？高坂ちゃんの家行くんじゃなかったの？」
「ん…あー、そういえばそうだった」
そういえばそうであった。
南と園田は学校から直接行ったけど、私は家で少し待機していたのだ、ＰＣを持って行くためなんだけど。動画見るために高坂の家にＰＣを持って行くのだ。
家は私が一番近いし、車椅子を入れてもそれほど離れてないので、私が自分から名乗り出たのである。
すぐ行かないのは、気になるテレビがやってたという至極個人的な理由である。
まぁ、５分程度遅れてもどうも言われまい、高坂に比べればマシな遅刻だ。
「…それじゃー、そろそろ行ってきます」
「あんまり遅くならないでねー」

徒歩で5分以内だから、車椅子でも10分以内で行けるだろう。もう少し早いかもしれないけども

「根本的な…何か…」

さてはて、何なんだろうかこの違和感。

トップとか最下位とかではなくて…そう、例えるなら、やってること。

「それは同じアイドルでは?」

この謎は暫く解けなさそうである。

032

何でかはわからないが、基本私達全員は店の方の玄関から入る。営業中は主に高坂のお母さんが此方にいるからだとは思うのだが、如何せん店の迷惑にならないのかと常々思っている。

入ってるのだけども、入るのだけども。

「あ、夢ちゃんいらっしゃーい!」

「お邪魔します」

今日はどうやら高坂が店番してたようだ。和菓子屋の娘だからお手伝いぐらいはす

る、らしい。

それなら和菓子に飽きているとか言うもんじゃないぜ、とは思うのだけど。

「ごめん！まだちょっとお手伝いしなくちゃいけなくて…あと少しで終わるからちょっと待ってて！」

「それぐらいなら待つよ、というか、私が頼む側だよ」

「ごめんねー。ことりちゃんと海未ちゃんも今二階でお客さんとお話してるみたい」

今日は二階での集会なので、私は誰かの助けが必要となる。この動きやしない脚では、階段なんて上れやしないのだ。

まぁ、それは置いておいて（どうでもいいが、『置いておいて』はなんだか洒落を言っている気分になる。多分、私だけだろうけども）話を聞く限り、南と園田は高坂の部屋でお客をもてなしてるようなので、上りを頼めない。二階で、なので多分和菓子ではなく高坂の客なのだろう。仕方ないので、私も少し待つことにする。

「…」

その間少し考え事をする。

Ａ―ＲＩＳＥ…スクールアイドルの最前線に居ながら、その人気は未だ衰え知らず、学校で行うライブには全国からファンが押し寄せ、チケットなんかまるでバーゲンのように消えていく。高坂がスクールアイドルを始めるキッカケでもあって、あの秋葉原の

アイドル人気を牛耳る存在。と、私が聞いた話によるとそんな感じ。
まるで違うね、うちとは。いや、違うなんてものではない、格が違うと言っていい。
しかし、何で此処まで私が考え込むのか、まるで空の上の存在のような彼女らに、何か起こらない限り関わることもないだろう彼女らに、私は一体何を悩んでいるのだろうか。
「変だよな…」
「何が変なの？」
おっと、高坂ではないか。…そうか、もう終わったのか。随分考え込んでいたようだな、私は。
「…いや、ババ抜きしたときの園田の顔が変だよな、って考えてただけだよ」
「海未ちゃん…そう言われてみればあの顔は…」
なんであんな顔するんだろ、あいつ。心理戦へタクソ過ぎるし、賭け事とか絶対無理だ。
と、考え事との話を変える私。
「って！その海未ちゃん達が待ってるんだよ！」
「あぁ、すまんな。肩を貸してもらえるか」
「もっちろん！」

何時もは園田に連れ添ってもらってるから、高坂に頼るのは久々である。うーん…和菓子の香りがする。
「えへへー♪夢ちゃんと一緒に歩くのも久しぶりだねー」
「大袈裟言うな、歩くなんて距離じゃないだろ」
「えへへー♪」
こいつも中々に変な奴だな。
そして、それを心地良いと思ってる私も同類なのかもしれないのだった。類友って奴。

０３３

「遅かったですね…夢」
「何かしてたのー？」
「こんばんは…」
部屋へ入ると園田と南と、小泉花陽一年生がいた。
どうやら、お客というのは小泉花陽一年生のことであったようだ。小泉花陽一年生は少しもじもじしながら座っている。

うん、可愛い。
しかし、どことなく何とも言えない空気が漂っているのは何故だ。園田がうつむいてるし。
「何があったのかと、とても聞きたいところではあるが。先にＰＣを出すぞ」
私は高坂から離れて床に座る。
さて…と、鞄の中には…ＰＣが、あります。ない、なんて事はありません。あってたまるものか。
「あとは任せた南」
「はーい。あ、ごめんね」
「あ、いえ…」
私は電源を入れたＰＣを南に渡して、お菓子の入った皿を退けた小泉花陽一年生のほうを見る。
んー…ふっくらとした柔らかそうな体、もっちりとしている頬、穏和さうな瞳に…やはりバストも８０越えてそうだ。やはり私の見立て通りであった、この子は絶対、抱き心地が良い。間違いない。
「え…あの……そのう…」
私に見られていることに気付いたのか、さらにもじもじし始める小泉花陽一年生。彼

女を見ていると、とてもとても苛めたいという欲望が出てくる。
可愛い後輩だなぁ、おい。
さながら小動物のような可愛いさである。
「あった！」
おっと、後輩の気をとられて本題を忘れるところであった。
「どれどれー？…わぁ！ちゃんと映ってる！」
「……こんなスカート着て…私…」
ふむ、ＰＣの画面内で再生されてる映像は紛れもない、μ’ｓの初の曲である『ＳＴＡＲＴ：ＤＡＳＨ!!』である。
高坂と南と園田が三人踊る様子が再生されていて、随分綺麗に撮れている、手持ちカメラではこうはいくまい。
しかし…後ろで客席を見ていた私は、三脚まで使って録画している輩の姿は見ていない。
つまり、別のところから録画されたものになるのだろうが…
「誰が撮ってくれたのでしょう？」
「わからん。私は見てないな、撮ってた奴」
「うーん……あ、花陽ちゃ…」

…おやおや、随分熱心に見てますね。
真っ直ぐＰＣを見つめる後輩を見て、私は高坂を肘で突く。高坂もコクン、と頷く。
「ねぇ花陽ちゃん」
「へっ？あっ！す、すいません！私…」
「やっぱり、アイドルやってみない？」
「えっ…？」
彼女は、さいあくμ's でなくとも、アイドルをした方がいいと私は思う。あそこまで情熱を掛けれる物を、そうそう諦めていい筈もない。やりたいならやればいいのだと、好きにすればいいのだと、私は思う。
…あの先輩は少し違うかもしれないが。
「でも私…声小さいし…運動も出来ないし…歌もそんなに…」
「そんなの、私達もですよ。私も、人前に出るのが無理なんです」
「え…？」
「私もよく歌詞忘れちゃうの、運動も得意じゃないし」
「私はおっちょこちょいだし！」
「私は足が動かん」
あれ？私だけ何か違う気がするぞ？

「それでもね…やりたい、って気持ちがあれば出来るんだ」
「やりたい気持ち…」
「ゆっくり考えて、もう一度答えを聞かせて？」
「・……はい」
小泉花陽一年生は高坂の言葉に真剣な表情で頷く。
これで、どうなるか、である。
私としては、良い方向に向かってほしい、と思う。
一方的で、勝手なものであるが。

０３４

「…夢はどう思います？あの子、入ってくれると思います…？」
帰り道、園田がふとそんな事を聞いてきた。
「さぁな」
「そう言うと思いました…」
「南は？」
「入ってくれると嬉しいけど…どうかなぁ…」

「ほらな、まだわからんのだよ。それに、やりたいようにやれ、って言ったのは私達だし、入るも入らないも小泉花陽一年生次第だ」
「それは…わかってますよ」
　可愛い後輩抜きしても、私は彼女に入ってほしいと思っている。あの子の性格はとても後ろ向きだ、物事をよくネガティブに考えて、それがどんなプラスかをわかってないのだと思う。
　はたして、どうだろうか……あ。
「テレビの録画忘れた…」
「今関係ありますか!?それ!?」
　最初に言った通り関係ないに決まってる。
　けれど、はぁ…あの番組見たかったな……。

『今回の報酬はこれでいいやー。』

０３５

「やぁ、小泉花陽一年生。昨日振りだ」

昨日の会談から今日、私は放課後小泉花陽一年生と中庭で出会った。出会った、というより、探してた、が正しいと思うが。まぁ、昨日のことと、もう一つ頼み事があったのだ。相手からしてみれば、こんな車椅子に乗った女が、と思うかもしれないが…まぁ、一目は会ってるし、大丈夫だろう、と思っちゃったり。

彼女は優しそうだし、私を無下にはしたりしないと思う。思う、のだが。

「夢さん…じゃなかった……先輩…どうか、しましたか？」

うーん、いい響きだ、先輩。彼女のような娘から呼ばれることでさらに良さが増している、気がする。

でも。呼び方なんて今更気にしないというのに、律儀な娘だ。

「昨日のことと、頼み事、用は２つ。あと普通にさん付けで構わない」

「え、えぇと…なら…夢…さん？」
　うむ、これもよいな。しかし、先輩かさん付けかと聞かれるとさん付けの方が良い、うん、きっとそう。
「うん、それでいい。それで早速だが…まだ結論は早いとは思うのだけれども、一応、頼み事ついでに聞きたい。決まった？」
「……いえ、まだ…決まってないです…」
「うん、まー、それは予想通り。仕方ない、ゆっくりと君のペースで決めてくれ」
　さてと、ついでは終わったので、改めて本題…もとい頼み事を…なに、簡単なことである、誰でも出来る簡単なことだ。たった一言許可を頂くだけで解決する問題だ。
「それで頼み事のほうなのだけど…なに、君がＹｅｓと言ってくれれば一瞬で終わることなんだけど…いいか？」
「えと…はい、私が出来ることでしたら…」
　そいつはよかった
「一回だけでいい、抱き締めてもいいか？」
　小泉花陽一年生の動きが止まった。
　ふむ、やはり頼み方が不味かったか、某雪ダルマの真似なんてするものではないな。
あ、雪だけに凍ってる（固まって）るってか？やけに高度なギャグだな。

あ、内容?それは勿論、あのもちもちとした小泉花陽一年生を抱きしめたいのだ。もしかしたらこれで関わりが無くなってしまうのではないか、と危機感を覚えただけなので、その前に一度だけその体をー、と思っただけである。他意はない、私にそんな気持ちは断じてない。それに、気持ちよさそうな物を抱きたいというのは皆思うことだと思うのだが。

「さぁ、軽くＹｅｓと言ってくれ。一度抱き締めるだけでいいんだ」

「…」

「やはり何か対価がいるだろうか、困ったな、私はあまりお金を持ってないのだが」

「…はっ!?い、いや…!そ、そうじゃなくて…!え、えぇと…冗談、ですよね…?夢さん…?」

至って真面目なのだけど、不真面目に見えてしまったのだろうか。いやいや、冗談ではないぞ?君を抱き締めたいだけなんだ、まるで氷を溶かす炎の如く…話の流れからすれば氷を溶かすのはキスなんだがね

「え、えぇえ!?ど、どうしよ…だ、ダレカタスケテー!」

ちょっと待ってて……ん?何か変な電波を受信してしまったようだ。うーん、物事はそう簡単にはいかないということか、難儀である。その点あの雪だるまはやり手だったということか。流石だな。

しかし…こうもオロオロされると何か問題があるとしか思えなくなってくる…いやしかし、理由なんて思い付かな…あ、もしかしてこれ、不審者みたいか？
「もしかして変態不審者みたいか？私」
「へっ!?あ、あの、えーと…あの、そのぉ…」
…成る程、目線を泳がせてるあたり、そう見えてるということか。
…変態で不審者やだな、特に不審者は
「すまなかった、どうやら変な風に混乱してたようだ」
「い、いえっ！謝ることなんて…！」
「随分馴れ馴れしいことをした、許してくれ。お詫びに私の体を差し出そう…」
「えええぇぇぇ!?さ、サシダシチャウノォ!?」
「冗談だ」
抱きしめたかったのは事実だけど、変態と思われるのは嫌だ。あー、抱き心地よさそうだったなー残念。
「さてと、本当の本当に本題は片付いたので私はそろそろトンズラこくとする」
「えぇぇ……はい…また、です…」
何か何とも言えない変な顔してたけど何かあったのだろうか、まぁいいや。
後輩にあたる彼女がメンバーに入ってくれると嬉しいー、なんてことをそれとなく呟

いてその場から離れようと……
「…」
「…」
「…真姫ちゃん」
「……何やってるんですか、先輩。あと、急にちゃん付けは止めて下さい」
「お話してただけだよ、小泉花陽一年生と」
西木野真姫一年生の目線が少し鋭い。私が本当に何かしたと思っているのか、信用ないな私。マジで何もしてないよ、いや、しようとしたけど無理だったんだ。だから違うぞ、断じて。
「それに、私はそろそろ帰るところだったしな」
「…そうですか」
「そうそう、お疲れ様だー西木野真姫一年生」
「……お疲れ様です」
なんでか居ても立っても居られず、その場から逃げるように車椅子を漕ぐ女がいる。
というか、私だ。
早いとこ消えてしまおう…いや、別に他意はないのだがな？

０３６

……タスケテー、ニャー、ワカンナイ。

さっきから学校から聞こえてくる奇声…もしかしてこれが七不思議か？まさかな…

「今日も屋上でしたよねー…っと」

屋上前の階段の近くで私は動きを止める。

個人的理由で遅れてしまったけれど、電話で三人の誰かを呼ぶに止まったのだ。練習中だと申し訳ないけれど、私は屋上まで行けないので誰かの手助けを必要するのだ。理由はとても簡単で、脚が動かない。なぁんて火を見るより明らかなんだろうが。というわけで携帯を取りだし……

「ん？」

私から見て右側の廊下、少し遠いが、あそこに見えるのは副会長さんではないだろうか。

ふむ、緑のリボンだから三年生だし、間違いないと思うのだが…あの豊満な胸もそうそうおるまいて、いてたまるか。

…下を向いて溜め息一つ。

「貧乳はステータス…っと」

さてはて、気を取り直して改めて。電話を掛けようか…

「こんにちわ」

…としようとして、噂の渦中の豊満な胸の先輩が話し掛けてきたので中断する。

…歩く度に揺れてる。何が、とは言わない

「…こんにちわー、副会長先輩。何かようですかねー」

「つれへんなぁ、なんかあらな話掛けちゃ駄目なん？」

少し困ったように副会長は笑う。

相変わらずイントネーションに首をかしげる関西弁だけど、不思議と様になっているのはなんでだろうか、何か包容力というのだろうか、母性のようなモノを彼女から感じるのが関係してるのだろうか？

決して胸とか関係なく。

「まぁ、いいですけど。何か話題でもありますか？大抵の話題は合わせれると思いますけど」

「なんや可愛げのない後輩君やなぁ…君の名前も聞いてないんやで？」

「それなら私もです。この際名前の交換でもしますか？」

すると先輩、懐から何かを取りだし…名刺かと思ったが（この歳で名刺も中々に愉快だが）違うようでどうやらタロットカードのようだった。

占いの道具であるソレを何故…はっ!?まさか…某ＲＰＧの占い師みたいに武器に…!?

と、思ったけど、普通に引いた。

「…いや、止めとくわ。君とはまたそのうち会うことになるって、カードも言ってるしな」

カードが…?もしや占ったのか、この瞬間、今。

えーっと、もしや先輩、わりと不思議ちゃんなのでしょうか。いや前に巫女服を来ていたことからもしかしてガチなのかもしれないが……まぁそれだとしても、今は一言。

「ア、ハイ」

そうことしか言えなかった私を許してほしい。あ、幻聴も聞こえてきたよー…なんかまたタスケテー、とか聞こえてきた…疲れてるのかな、私。

「ふふっ、ほなな。また会いましょ」

あの日と同じように、彼女はほなと言って去っていった。

…しかし、なんというか、その

「変な人だよな…」

私が言えた口じゃないけれど、変な人だと思う。うん、変な人だ。

０３７

今回のオチというか、結論。
部員が三人増えた。小泉花陽一年生と、その友人の星空凛一年生と、そしてなんとなんと、西木野真姫一年生である。
場面をカットしまくってすまないが、私も副会長も会話してて気付かなかったんだ、本当だよ？てっきり、あのタスケテーとニャーは幻聴だと思ってたんだ。
私が電話掛けた時には全部終わってたんだ。
ってゆーか、感動のシーン見逃して少し私は悲しい……そこ、手抜きとか思…っても仕方ないな、これは。では私の頑張りって一体なんなんだろうか…
って、いじけてたら花陽一年生が、『一度だけなら…いいですよ…？』と控えめに言ってくれたので、存分に可愛がって癒されたることにする。
今回の報酬はこれでいいやー。

『どうにかなんないかなぁ、難儀だ』

０３８

今日の私はすこぶる機嫌が良かった。
理由としては、あの小泉花陽一年生が眼鏡を外していたからだ。
いやぁ、可愛いかった。
朝錬の場所へ来たら、可愛い美少女がいた、それはそれは驚いた。
人は眼鏡を外すと魅力的に見えると言う、凹レンズと凸レンズの関係で眼鏡を外すと目が大きく見えて可愛く見えるらしいからだ。
ただ、ね？眼鏡を着けてた小泉花陽一年生も可愛いかったよ？でもね？眼鏡外したその姿…綺麗な花のように愛らしかった（花陽だけに）
これには私のドキが胸胸、じゃなく、胸がドキドキしちゃって心のカメラで保存しました。
え？長い？心の内心が何を言うか、小泉花陽一年生の可愛い談義はまだまだ続けさせて…

「うん！眼鏡外した花陽ちゃん、可愛いかったよね～」
「わかってくれるか高坂、やはりお前は私の親友だよ」
「照れるよ～」
「夢のは何か違う気がしますが…」
　なんだと園田、いい度胸じゃないか。
「高坂の家でアイドルの練習してたのバラすぞ」
「何故そのことを!?」
「私を舐めるなよ園田、お前のことならなんでもは知らないが、知ってることだけ知ってる。何からバラしてほしい？饅頭食べ過ぎて増え気味の体重か？それともウエストか？ヒップか？それともそれとも、最近大きくなってないバストか？それとも…」
「も、もういいですぅ!!やめて下さいぃ!?」
「ははは！お前には負ける気がしないぞ園田！」
　…って、これじゃまた園田を苛めて終わってしまう。同じネタもそう何度も受けない、何か別のオチを…　うーん…セリフでもいい…なにか…そうだ！
「私は悪くない」
「!?……ことりぃ…」
「夢…　ちゃん？」

…泣かせてしまった。
ううむ、このセリフ、自分で言っといてなんだが、凄いウザイ。記憶にもない見知らぬ学ラン先輩には悪いがこれからは自重せねば……
あー、すまない園田、饅頭でもケーキでも奢るから許してくれ、南の視線が怖いんだよー。
え？また太る？ならカロリーメイトでも……

０３９

適当に授業の時間はスッ飛ばし、放課後の屋上。
何時もの練習場所、私は園田に連れられ屋上へ、車椅子は高坂が。
「本当に迷惑かけてすまないな」
「いいんですよこれぐらい」
優しいなぁ、お前らは。朝のことがあったのに、私涙出ちゃうよ
「はいはい…あ、今日は少し日差しが強いので気をつけて下さい」
「はーい、と」
見事な気配りだと感心するがどこもおかしくないな、うん。

さて、と…私は屋上では下に敷かれたシートの上で皆の練習を見ているのだが（ちなみに今日は一年生は初めてなので今日は本格的な練習は休憩なのだ）…皆楽しそうだなぁ、私も参加したいなぁ、と少し思ったり。
「でもダンスは…」
そうだよなぁ、私踊れないんだよなぁ。すっごい残念です。本当に残念です。
「なら…夢ちゃんは歌おうよ！一緒に！」
「歌…だと？」
それは考えなかった。踊れないなら歌えと、そういうことだろう。
「でも、邪魔にならない？私が歌ったらテンポとか崩れないか心配なんだが」
「大丈夫じゃないかなぁ？夢ちゃん歌上手だし。ねぇことりちゃん」
「うん♪夢ちゃんのお歌、すっごく上手だし、邪魔じゃないと思うよ？」
あらやだ過大評価、そこまで上手くないよ私は、お前らのほうが上手いって絶対。
そう言うが、もう既に歌わなきゃいけない雰囲気になっていた。逃げ場はない。
「私も気になりますねそれは」
「君もか真姫ちゃん…」
「はい、あと先輩からのちゃん付けは違和感あるので止めて下さい」
…自信はないけれど、そこまで期待されてるならしょうがない、皆に合わせて私も歌

うことにしよう。なにより暇だったしな

「うん！よーし、それじゃあいっくよーー！」

ラジカセ？から曲が流れて…とりあえず、適当なタイミングで歌ってみることにする

「悲しみにーとーざされてー、泣くだけのーきーみじゃなーいー♪」

…上手いか？これ。と人は自分の歌の上手い下手はよくわからないのだった。

０４０

歌は意外の好評だった。あの真姫ちゃんからもｏｋ貰ったので大丈夫だと思う。

…私にも歌の才能が…！

なんて思ってることにする。心なしか今日は声もよく通ってた気がするし、咳き込んだ時は心配されたが

「ただいまー」

家。

私がこの世界で一位二位を争うほど居心地の良い場所。とは私の談。父親はよく仕事柄家にはいないが（よくは知らないが、外国に行く仕事らしい）、敬愛すべき母親がい

る（母親は主婦だ）。しかも自分の部屋もある、あぁなんと素晴らしきかな我が家。
「おうお帰り」
「父さん、帰ってたのか」
　家の居間にはさっき言った私の父親がいた。髭を剃ってあるようだが、髪がボサボサだ。まぁ、汚いというわけではない。
「淡白だなおい、もうちっとなんかないのか？」
「キツいのをお所望か？」
「いいや、遠慮しとくよ。ご所望したって仕方ない」
「それもそうだ」
　今日は久しく父さんが帰っていため、母さんの姿が見えないのはテンションが上がって買い物長引いてるとかだと思う。
　そういえば
「今回は土産あるのか？」
「おう、外国のソファーだ。俺が今座ってるやつな」
　ほほう、いやなに、中々座り心地のよさそうなソファーではないか。良い買い物をしたな…でも、お高いんでしょう？
「はっは、それがよ、９８００円で買えたぜ」

「それはそれは」
　随分お安いですな。
　しかし、今更ながら父さんと会話していると、どうも同級生の友人と会話している気分に陥る。ブランクと言うか、親しみやすいというか、子供っぽいと言うか。そんな感じだろう。
「しっかしまぁ、会話が女らしくないなお前。久々だけどそう思うわ」
「あんたら両親二人を見てきたんだから当たり前だよ、お父様？」
「やめろやめろ、むず痒い」
　父さんは嫌々そうに手を振って、一旦言葉を止めた。
　この顔は、言うか言うまいか悩んでる顔だ。何を、かはわからないが、この時の父さんは少し真剣な話をすることが多いのだ。
　少なくとも、今みたいな会話をしてるときには決してしない顔だ。
「……いいか、言っちまおう」
　決まったようで何より。
「お前の足を治せるかもしれねぇ医者が見つかった…かもしれん」
「…随分、曖昧な表現だな」
「俺の知り合いからの伝でな、どうやら外国にいるらしい。詳しい話はまだわからん、今

回帰ってきたのはそれを含めての話をしたかったからだ」
…どうでもいいが、父さん、今までのキャラで一番喋ってないか？使ったワード一位じゃないか？
…本当に、今はどうでもいいのだけど
「…まぁ、それは母さんが帰ってきてからにしよう、でも、少しは考えといてくれ、その足」
「…わかったよ」
随分と、心を揺さぶってくるものだ。
「…でもさ、私は知ってるんだぜ」
父さんが言い渋るのは、私の幸せの時間がなくなっちまうからだって…
全くもって…
「どうにかなんないかなぁ、難儀だ」
私は部屋から出つつ、キメ顔でも全然ない顔でそう言った。

『結局は南の意見に落ち着くのだった』

０４１

今日もまた、朝練。どうせ明日も朝練。

はっきり言おう

正直、私はつまらなかった。

なんせ皆は走ったり踊ったりしてるから余裕がないのかもしれないが、私はそうもいかない。動かないし眺めるだけの私にやることはない。

暇というより、麻痺だった。逆さまである。

この場合逆さまというのは今現在進行形で地面に倒れ伏せている我が幼馴染みの視界のことを指すのかもしれないが、私の視界も逆さまだ。暇過ぎて首を車椅子に預けているからだ。

「あー…暇だ」

「夢ちゃん!?今サングラスの人に解散宣言されてたんだよ!?」

「起きたか高坂…あぁ、そうだな」

どこその見知らぬ詐欺師を連想させる動きで私は首を持ち上げる。
あぁ、しんどい。
しかもその宣言した人ってもしかしなくても矢澤にこ先輩のことだろう。変装してたが私にはわかる。
髪の色とか、胸の大きさで。
しかし、にこ先輩も遂に動き出したということか…
「夢ちゃん何か知ってるの？」
「知っていると言えば知ってるぜ南。だけど、プライバシーの問題もあるから教えるのはちょっと引けるな」
「フライバンジー？」
「確かにバンジーは跳ぶがフライのとぶじゃねぇよこのお馬鹿。私が言いたいのはプライバシーだ」
ナチュラルに言葉作ってんじゃねぇよ。
「ごめん！噛んじゃった」
「いやいや…ワザとだろ」
「え？普通に噛んだんだけど…」
「素だった！」

何だか楽しいぞおい。その矢澤…某先輩の話はどうした

「あ、そうだ！先輩と言えばね…」

「お？急に話の転換しやがったが、なんだ？その…某先輩に関係あるのか？」

「先輩って字は先の生まれた同列の仲間って意味なんだって！」

「関係なかった！しかも無駄な豆知識！」

お前がそれを知っていたことにも驚き…いや、こいつは数学が駄目なのであって、他は別にそれほどだっけか。

「せめて関係ある話をしないか？その……先輩に関係ある話」

某と言うのも飽きた。

「そういえば、その人が先輩だってよくわかったね夢ちゃん」

ギクッ。

「先輩ってことは同じオトノキの学生さん？」

ギグギクッ。

「夢ちゃんがわかりやすい反応してる…」

「夢ちゃん…」

しまった、これじゃポーカーフェイスの千里川の異名に傷ついてしまうぜ。

「そんな名前ないでしょー！」

素晴らしく話が脱線している。戻さなくては…何を、何を言えば…

「うーん…とりあえず、海未ちゃんにも言ってみよっか」

結局は南の意見に落ち着くのだった。

０４２

点呼で、高坂、園田、南、小泉花陽ちゃん、真姫ちゃん、星空ちゃん。あと一応私。合計七人。

うん、指定の五人はとうに越えている。これなら生徒会長も文句言うまい。

「くぅぅ…！こんなにメンバー増えたぁ！」

高坂も喜んでいた。うんうん、予てよりの目標は越えたし、可愛い後輩が三人も増えたしで、メンバー探しは文句なしの成功だ。…私が結末を見損ねた以外は。

「よぉし！今日も張り切って練習いこー！」

ってあれ？生徒会長の所に行くんじゃないのか？とりあえず練習して、そのあと行くのか？って、もう動き出してるし。

「一番乗り――――」

ザ――――

「…」

星空ちゃんと高坂が屋上に着いたんだろう。

ただ、その直後に雨が降りだした。

狙いすまされてんな…

なんというベストタイミング、いやバッドタイミング。

結局練習は中止となり、皆で室内に戻ってきた。

「うぅ…雨が降るなんて…」

「冷たいにゃ…」

「元気出せ高坂、雨なんてもんはその内止んでまた降りだすもんだ」

「そうだよね…って降るの!?また降っちゃうのぉ!?」

心なしか小泉花陽ちゃんみたいな話し方になってるぞ高坂。

「雨止まないかなぁ…」

「……雨と言えば…」

珍しい、園田が話を振った。

「狼子供の雨と雪…という映画をことりに見せてもらったんですが…」

「あぁ、あの狼男と子供作っちゃった奴か」
「なんだか言い方に含みがありますね…ストーリーを全部言うのはあれですが…まぁ、あれの最後に雨の方が…」
「うん、見たことない奴の為に続きを言わなかったのは偉いけど、それがどうした」
「あのシーンで不覚にもうるってきてしまって…母親としての親心が表現されてていい映画だとは思いませんか」
「そうだな。母親ってのはああ有るべきだと私も思うが…それで?」
「はい、はい? いい映画ですね?」
「はっ?えっと…もしかしてオチないの?」
「オチ…?…はないですね。はい」
「…」
……。
なんてこった… 今回ネタにオチが無さすぎるぞ…これじゃオチがないのがオチみたいじゃないか…
オチじゃなくてネタの質が落ちてるよ…
「…それはいいんだけど、雨、止んでない?」
真姫ちゃんが発した言葉に全員が窓の外を眺める

雨は止んでた。
「やった！止んだ！屋上へ行こう！」
「ちょ…また何時降らないともわかったことでは…」
ザ――――
ものの見事にフラグが回収された。
高坂と星空ちゃんの二人は雨の中でも――――！と言って練習しようしたが、滑って転んで帰ってきた。
もはや回収ではなく頭を改修すべきだな…（流石に言い過ぎ）
「バカね…」
「バカなんです…」
そのあとは言うまでもなく、雨が止む前に下校時刻となったのだった。
狼男の雨と言ったが、この雨は雨は雨でも雨男だった。
瞬きを三度。

０４３

某バーガー店。

結局、雨で練習出来なかった我々はバーガー店でポテトとかを食べているのだった。
高坂の顔は凄い不機嫌。
ちなみに、私はポテトとバーガーのセットだ。
「結局練習出来なかった…」
「…明日も雨だって」
「むむむぅ…」
「仕方ないさ、空の機嫌は空次第なんだから」
「むぅー…あれ?」
高坂が何やら困惑している。
「どうしたの?」
「ポテトが…無くなってる…」
「自分で食べたんじゃないですか?」
「違うよ!確かにまだあったのにぃ!」
高坂の視線が皆に向かう。
「真姫ちゃん!食べたでしょ!」
「なんで私なのよ!」
「じゃあ夢ちゃん!?」

「バカ言え、流石に自分の食べるっての」
　しかし、高坂が食べてないなら高坂から食べ物を奪ったのは誰だ？高坂は食べ物のことには少し煩いのだ。誰だか知らんがちょっと恨むぞ。
　そんなやり取りしてる内に、高坂はイライラを発散するように呟き始めた。
「そもそも何でこんなことに…」
「雨が…降ったから…？」
「それだよ！練習場所がないからこんなことに…」
　……あれ、もしかして、私だけが考えてたのか。もしかして、こいつ――――忘れてる？
「部室があればね…」
「五人いれば部活の申請出来るんだけど…」
「五人…？」
　私を除く全員がメンバーを見渡す。
　一人、二人、三人、四人、五人、六人…一応七人。
「いるじゃん!?部活の申請出来るよ!?」
　高坂がそう言った直後、忘れてたんかーい！と何処かで聞いた声で何処かで聞いたツッコミが聞こえた。

…にこ先輩いたんすか…どこにいるかはわかんないけど…

「駄目かもしれない…」

真姫ちゃんがそう呟いた。

安心しろ、私は常日頃から思ってる。

って、あれは…

「あはは…明日申請しにいこ…」

高坂や私や全員を含めて、高坂のトレイの上のバーガー…もとい、そのバーガーに壁一枚隔てた向こうの席から伸びる手と腕が見たのだった

「…」

……。

手はスッと引かれ、その手の主であろうサングラスを掛けた奇抜な帽子の人物がそっと席から立った。

「ちょっと!?」

「ひぃ!?」

サングラスを掛けた人物は高坂に声を掛けられ、怯えた声を出す。

「って貴方今朝の…」

声の主は咳払いをして、ふんっと声を鳴らした。

「解散しろって、私言った筈だけど？」
間違いないってか、確信。確信よりも核心をついている。
――――絶対この人にこ先輩だ…
「そんなことより！私のポテト返してよ！」
「ソッチ!?」
そっちかよ！
思わず真姫ちゃんと同じツッコミしちまったじゃないか！
「ふ、ふん！貴方達はなってないの！色々と！スクールアイドルとして、さっさと止めることね」
まるで都合の悪い話は無視して言いたいことだけ行ってにこ…いや、サングラスの人物は外へ飛び出して行った。
子供に下品な言葉浴びせられてる…
「なんだったんでしょうか…あの人…」
「変な人だにゃー」
「穂乃果のポテトは!?」
散々な言われようだ…
星空ちゃんに至っては『変』呼ばわりだし…

「ポテトなら買ってやるから黙っとけ。ポテトでもジャガイモでも買ってやるから」
「ジャガイモ!?調理前!?」
しかしですねサングラス……にこ先輩。多分、貴方の言うことは聞かないと思います。いや、聞こえないと思います。残念ながら…と私は『変な』格好のにこ先輩を思い出して、静かに手を合わせた。
特に意味はないのだった。

『行け！星空凜ちゃん！君に決めた！』

０４４

お久しぶり、と言うべきか、それともすまない、と言うべきか。私にはそんなことわからないけれど、とりあえずこれだけは言わせて下さい。

――花陽ちゃんは可愛い

全く関係ないだろって？いやいや、そもそも今私話してる相手は誰だよ、自分の脳内だろうが。つまり何を言っても自由だ、脳内まで監視とかやってられないだろう。

口調が安定しない？仕方ないさ、私は語りべには向いてないんだから。この物語だって、何処に間違いがあるか、なんてわからないんだぜ？気楽に行こう。

閑話休題

…前文はエラーが発生しました、削除します――なんて言っても信じてもらえそうにないから、何時も通り進めるとする。

何時も通り、適当で、いい加減な、千里川夢による物語の語りが始まるだろう。つらづらと、サラサラと。さながら川のように、語るだろう。

さながらサブタイトルを付けるなら、『せんりドリーム』、だろうか。
…自分の名前を入れながらだが、ダサイことこの上ないのだった。
というか、変だ。
少々恥ずかしいが、久々でテンションが上がっているようだ、おそらく０４４番は私の脳内だけで終わるだろう、許してくれ。
誰に、だろうか？最近電波が酷いものだ。私の脳内を覗き見する不敬な奴でもいるのだろうか、いるとすれば神様か…同じ人間か…もしやもしやのどんでん返しで、宇宙人とかだろうか。とすれば下手なことは考えられない…花陽ちゃんであーんなこと（比喩）やこーんなこと（比喩である）を妄想する私の脳が世間様に晒されてしまうじゃないか、逮捕ものである。
普通に言って、窮屈。下手に言って、迷惑。
まぁ、そんなことはないだろう。そんな妄想（見られてる云々）は中学の時に卒業した。そんなの只の自意識過剰である。自虐も含んでるから、自虐識過剰かもしれない。
…笑えん冗談だ。
まぁまぁ、仮に見てる人がいるなら、こう言ってやりたい。
――――女子高校生の脳内見て楽しいかい？
もうちょっと他にやることないのかな？暇なのかな？時間をもて余してるのかな？

もて余らしているのかな？ほら、例えば恋人作るとか、仕事するとか、結婚するとか…そういう幸せなことだ。幸せになれよ？なんて言うつもりは勿論私にはないわけだが、勘違いのないように言っておくと。

でもまぁ、時間を有効活用したまえ、ということだ。

……。

……。

……。

……。

…さて、今何人残ってるかな？さっきの暴言で時間を惜しんで観覧してくれてた人がこぞって居なくなった感じがしたが…まぁ、過ぎたことだ。

関係ないし、歓迎ない。

さてさて、では此処に残っているのはこんな私の語りを聞こうとしてくれてる人なのかな？あ、返事はいらないよ。

本来ならば最初にすべき注意だけど、だったのだけど、まぁ仕方ないね。狐に騙されたとでも思っていてくれ。いや化かされた、だったかな？

それはどっちでもよいので、次に進めさせてもらうが？…いいんだね？念を押すようで申し訳ないのだけど、一応、ね？

……ふむふむ、ふむふむ。よし、じゃあよさそうだし進めるとしよう、物語の続きを、お話の続きを、語りの続きを。存分に、見ていって下さいな。

――――勿論、私の脳内を覗き見する奴がいればの話だけど。

０４５

「アイドル研究部、というものがあるわ。アイドルに関係する部活が２つもあるのは駄目、たださえ生徒数不足で部活の乱立は避けたいの」

「ダンス部とかじゃ駄目ですかね」

「それだとアイドルじゃなくなっちゃうよ夢ちゃん」

「駄目か」

「駄目です」

「諦めて頂戴」

駄目だった。

全方向からの否定で非常に深い悲しみを背負った気がする。

気がするだけだが。

「じゃあ合体とかならええんとちゃう？アイドル研究部と合併して。……あっちは部員

もあれやし」
横から、やはり関西弁のイントネーションがどこか変な副会長からのお言葉だ。
だが、前向きに検討というか、それしかない気がする（普通にやっても生徒会長に邪魔されそうな為）。
…そういえば、関係ないけど生徒会長の情報集めはまだやっていなかったことを思い出した。最近暇だし、やってみてもいいかもしれない。それに、学校内の情報なんて意外と学校内だけで集まるものだ。
「アイドル研究部かぁー、どんなところなんだろー」
「ですが…どうやら部員は一人のようですよ」
「部長さんが一人なんだよね、どんな人なのかなぁー」
「意外とちっちゃいかもな」
そういう経緯があってアイドル研究部へ向かっている最中。
いやいや、別に事情なんて入ってない。断じてだ。私はあくまで、そうかもなぁ、というイメージを口に出しただけだ。他意はない。
本当だ。
「なら大きい人かもしれないにゃー」
「こ、怖い人だったら…」

「花陽ちゃんは私が守ってあげるよ」
花陽ちゃんの言葉に間髪入れず発した私の言葉に何故か皆少し引いていた。
何故だ。
何故なんだ。
私は善意で言っただけなのに。ああ悲しきかな、理解されぬ正義ほど空しいモノもあるまいに。
――なーんてこと言っちゃうから私は引かれるのかもしれないのだった。
「あ、ありがとうございます…？」
花陽ちゃんも少し困惑しながらお礼を言うのだった。やめて、傷つく。というか、傷ついた。
「あー駄目だー生きる気力がどんどん失われていくー、自殺したくなってきたぜ」
「はいはい、わかりましたよー」
む。園田の奴適当に流しやがって、私のフリを。まぁ、このネタは数えること一五度目だから飽きられても仕方ない。
――次はもっと面白いネタを作らねば。
密かに決心したのだった。
「あ、ここだ、アイドル研究部」

高坂がいる場所には確かに、アイドル研究部と書かれた扉。間違いなく此処が、我々の目的地であるアイドル研究部の部室なのだろう。私が前々から入り浸っている場所だ。

――いやまぁ、知らなかったと言えば嘘になるけど…この雰囲気で言うのはちょっと……

「ちょっと、そこで何やってるの」

誰だ！私の内心のちょっとに被せて口を挟んできた奴は！場合によってはセリフ被せ罪だぞ！

勿論、そんな罪もなければ相手に非もない。あるのは誰に聞かれるまでもなく一人ツッコミしている私の内心だけだった。

けど、この声の主ぐらいはわかるとも、最近聞かない日も少なかったしな。

「げっ、あんた達…」

声の主もわかったように後退り。

後ず去り。

「あー!?前の…」

と、高坂が言い切る前に、相手は駆けた。

――ふふふ、それは甘いですよ先輩（内心）。と呟き、想定していたように命令を下

す。
「行け！星空凜ちゃん！君に決めた！」
「凜はポケモンじゃないにゃー！」
「なら名前をつけてやろう、君の名前は今日からニャースだ！」
「もろにポケモン!?凜は小判つけないし爪も伸びないにゃ！凜は凜だにゃー！」
「分類ならこねこポケモンかな？」
「エネコでもないにゃー！」
　はっ!?そんなことしてる間に先輩が逃げている！なんてこった！
「もー！夢ちゃんー！」
「すまない！」
　私達は（私のせいだが）謎の先輩を追って学校を走る羽目に（そもそも走れないが）なりそうだったが、謎の先輩は体力がなかった為簡単に捕まった。
　捕まったというか、逮捕に近い構図だった。
「ぐぐぐぐ???」
　とまぁ、一先ずこれで話ぐらいはできそうだった。気分も乗ったので連行される謎の先輩に私は一言言ってやった。
「なんだか先輩、捕まった宇宙人みたいですね」

「誰が宇宙人よ！」

ツッコミのキレの良さはいつも通りだった。

『流石は私の惚れた人だ。』

046

「先輩、愛してる」
「ノーセンキューよ」
「先輩、受してる」
「似た漢字並べてもダメよ、ノーセンキュー」
「どうして!?どうして私のラブコールを受け取ってくれないんだ先輩!」
「どうしてもこうしてもないでしょ!?なんのつもりよあんた!わざわざ二人きりになるように人払いまでして!」
「……」

そろそろ説明が必要だろう。

簡潔に言うと、今この場。ようするにアイドル研究部部室には、この私、千里川夢と、矢澤にこ先輩しかいない状況なわけである。

高坂達はどうしたかと言うと、部室の外である。誰であろう、私から頼んで出ていっ

てもらったのである（なおその際、部室を見て小泉ちゃんと南が騒いでいたのは別の話）。
「だって、前回があんな感じで終わっちゃったし。今回は私が色々やりたいじゃないですか」
「なんの話よ」
具体的には『今回の報酬はこれでいいやー。』の回のことである。
だって、私が全然活躍出来てなかったではないか。仮にも語りべがそれでいいわけない（これは別に主人公だから、なんて自意識過剰ではなく、単に私が見ないと描写出来ないからである）。
「というわけで、仲間になってよお姉ちゃん」
「だれがあんたのお姉ちゃんよ。ふんっ、なんでこの私があんた達をお手伝いしなきゃいけないわけ？」
「お手伝いじゃありません、仲間になって下さいと言ってるんです。明確に、明らかに、我らがμ’sに入って下さいと、私は真剣に言ってるんです」
「……言った筈よ、嫌だって、拒否だって」
…にこ先輩ならそう言うだろうとは、薄々どころか濃々気がついていた。
けれども。

だけれど。

私だって半端な気持ちでこの場に臨んでいないのだ。本気で、臨んでいる。

……それに、なにも知らないわけではない。にこ先輩のことはある程度調べた。その過程というか寄り道で、にこ先輩の過去はある程度知っているのだ、私は。

先輩がアイドルグループを組んでいたことも。

メンバーがやめていったことも。

今だアイドルを目指していることも。

あくまである程度、だが。

「矢澤…にこ、部長」

「……あんた部員じゃないでしょ」

「…もう、頼むのはやめます」

「……やっと諦めたわけ？」

「いえ…押してダメなら別方向から押せ。スカウトが駄目なら、私が入るまでです」

「…はぁ？」

鞄から取りだし、机を叩きつけたそれは、一枚の紙。端から見てもわかるこれは、入部届である。

勿論、アイドル研究部の、入部届だ。

「……なに、これ」
「この部に入部します。印鑑も押してますし担任からの許可も降りてます。私だけじゃないです、全員、入部希望です」
　スカウトは駄目。彼女のプライドが許してくれない。だから、押してダメなら別方向から押せ。逆に入ってしまえということだ。
　押して駄目というより、推して駄目なら、だ。
「どうぞ、ご教鞭お願いします、部長」
　にこ部長の表情は見えない。下を向いていてよく見えない。
　けれど、私の予感さえ当たっていれば。当たってくれているのなら――
「…この部は厳しいわよ?」
「臨むところです」
「ダメならダメでちゃんと言うわよ?」
「望むところです」
「さっきと字変わってない?」
「すでろことむぞの」
「誰が逆さまにしろと言った」
　ふう。とにこ部長の一息。

これは呆れられてる奴だ。
「…いいわよ、あんた達の入部を認めてあげる。だけど、勘違いしないでよね、あんたの為じゃないんだから」
「テンプレのようなツンデレまで使いこなすとは…」
流石はにこ部長だ。
恐れ入る。
流石は私の惚れた人だ。

０４７

後日談というか、今回のオチ。
後日、私達は正式にアイドル研究部の部員となったのだった。
ちなみに、にこ部長の新部員の私達へ向けた最初の一言は。
「キャラを作りなさい。あんた達はキャラが弱い」
だった。
キャラとはなんだとか、え?これでダメなの?とか色々ツッコミ所はあったのかもしれないのだろうが。まぁ、微々たるものである。

流石は私に真似出来ないことを平然とやってのけるにこ部長であった。
「ちなみに私は、歴代ボスなら大統領が好きよ。あの一直線なところに共感が持てるわ。やってることはアレだけど」
とは、私の同じくジャンプ派のにこ部長のお言葉であった。
ではでは、部長も（正式に）加わって七人（私を入れて八人）となったμ’ｓ。
部員も、部活も、部室も、部長も手に入れた私達は本格的にスクールアイドルを始めれよう。
よって、今日もにこ部長による、あついご指導（ちなみに、熱いと厚いを掛けたネタだ）を受けてアイ活を頑張るのだ。
「ほら！声が小さい！こうよ！にっこにっこにー」
「に、にっこにっこ…」
「ほら！そこのつり目！ちゃんと真剣に！」
「真姫よ！」
「にっこにっこにー…」
「ロングスカート！表情が固いわ！」
「名前で呼んでくれよ…私の名前は千里川夢だ」
「ちょっと寒くないかにゃー？」

「なるほど……！」

等々と、それなりに楽しいの部活動だった。

……そういえば、顧問っていないのだろうか。

……。

触れてはいけないのだろう。

『週刊少年ジャ○プじゃないっすか』

０４８

「……」

人間とは睡眠を取る種族である。基本的には七時間から八時間の睡眠が良いとされる。それ以上は寝過ぎで、それ以下は寝なさすぎ、ということらしい。寝過ぎても寝なさすぎても、体に悪いし寿命も減るという説まであるらしい。寝る子は育つ、というが寝過ぎると寿命が減る、とはなんとも皮肉である。

「……眠い」

よって昨日あまり寝ていない私が、部室で昼寝をしているのは正当な健康補助なのである。体に悪いといけないからね。

「…誰も来てないな」

時計を見るに十分程。待ってれば誰か来るだろうと思って昼寝してたが、誰も来ない。

まぁそもそも独断で部室を使った上に昼寝までして、そっちから来いは流石に失礼かもしれないが。

こんなとこで昼寝するのは私ぐらいだろうし。
「うーむ…しかし本当に一人も来ないとは」
もしかして皆の中では既に私はいない子扱いなのだろうか。あれか、イジメか。
泣くぞ。
いやまぁ、あいつらに限ってそれはないだろうけど。私と違ってそこまで卑屈じゃないし。
「ちょっと？勝手に部室を使ってる阿呆は何処のどいつかしら？」
やっと一人来たか。と、おやおや？
「誰かと思えばにこ先輩、会えて嬉しゅうございますよ」
「私はそんなに昔の人じゃないっての。他の三人は？」
「不知火。」
「知らない。」
「多分ナンパでもされてんじゃないですかね」
「難破？」
「軟派。ほら、あいつら私と違って愛嬌あるし、スタイルいいし、モテモテでしょ」
「軽い自虐入ってるわよ。で？ナンパされてる時にあんたはなにしてんのよ」
「そりゃまぁ…精神統一？」

「あんたはまず誠心を統一しなさい」
「こりゃまいった」
「……あんた最近ボケが甘くない？ダメよ、アイドルとして妥協は許されないわ」
「日頃からにこ先輩のツッコミに値するボケをしようとは努力してるんですけどね…今日はちょっと…」
「なに？」
「眠い」
「は？」
「ねむい。あいむすりーぴー」
　長い話をして逸らそうとしてたが遂に言っちゃった！いやぁダメだなぁ私、尋問とかされたらすぐ吐いちゃうわー。
　自分ならが白々しいことこの上なかった。
「いつもは無駄に発音のいい横文字がそれな辺りガチなようね…それこそ御法度よ、アイドルたるもの健康美意識はしっかりしないと」
「いや別に私アイドルやりませんけどね」
「で？何してたのよ？」
「なにって…いや、安易は下ネタはこの小説の原作に失礼だ。それはあれですよ、普通に

テレビですよ」
「本当は？」
「カード触ってました」
「なんの？」
「遊…はっ!?これは誘導尋問!?」
フラグを速攻で回収しちゃいました。
「あんたが頭が回ってないだけじゃないの」
「頭が回るって聞くと凄い猟奇的ですよね」
「想像したら怖いわ」
うーん、しかしこのままにこ先輩と話して終わるっていうのは流石に話的にあれだし、そろそろ教室に戻るかなぁ。
私は全然いいんだけどな。寧ろ来い、雑談。
「あ、そういやにこ先輩はなんでここに？」
脳内と行動が逆だぞ私。全く役に立たない体だなおい。
「あー？あー、まぁちょっと用事ね」
そう言うと先輩は部室に設置されているパソコン…の横の棚から何かを取り出した。ってあれは…

「先輩それって…」
　見間違える筈もない。少年心が煽られるその表紙、どっかで見たことあるキャラクター、そして分厚さのわりにお値段が安いサブカルチャー雑誌……
「週刊少年ジャ〇プじゃないっすか」
「多分伏せ字意味ないわよ」
「でも学校に漫画とか大丈夫ですか先輩？」
「部室にＤＶＤある時点で察しろ」
「え？でもあれって部活の資料…」
「これも資料よ」
「史料っすか」
「そうよ。というか、この関係のない漢字を変換させただけシリーズも飽きてきたわね」
「全くなんの意味かわかりませんしねー」
「大体はあんたのせいだけどね。せめて洒落でも掛けた変換にしなさいよ」
「返還します」
「つまらん」
　キツイ一言を喰らった辺りで、そろそろ昼休みが終わりそうだったので、本当に教室に戻るとする。

文字数もいい感じだし。
「じゃ、私、昼休み終わるし文字数もいい感じだしなんで教室に戻りますね」
「あ、そ。放課後は集合だからね」
「あいあいさー」
「マムでしょ」
「関係ないけどあいあいさーってどっかの方言みたいですよね」
「本当に関係ないわね」
では本当に（二回目）教室に戻るとしよう。
……ところで今回、会話が結構適当なのだがいいのだろうか。もう一つの原作に失礼でないか、少し心配である。

０４９

謎が一つ解けた。どうやら皆がいなかったのは取材を受けていたからしい。とは言っても、新聞に載らなければホットでクールな昼辺りのニュースに映るわけでもなく、ただの部活動紹介的なあれらしい。
「でもなんで私に言わなかった」

「えー？だって夢ちゃんいなかったしー、そもそも取材に夢中でそれどころじゃなかったっていうかー」
「こいつウザい…何処でそんなウザい言葉を覚えた」
「夢ちゃんでーす」
「しまった私だった」
　しかし成る程、道理で南が高坂の鞄に何か仕込んでるなー、とは思っていたが、これの為だったのか。
　でも普段の高坂って…
「ありのままずぎるよー！」
「寝て食って寝て怒られてって出来の悪い子供かお前は」
「普段からだらしないからそうなるんです」
「むーっ、じゃあ海未ちゃんのはどうなのー」
「私ですか？」
「勿論撮ってあるにゃー」
　そこには！弓道の練習の合間に鏡に向かってスマイル（０円ではない）の練習している園田の姿が！
「……」

「……」
「……おい、何故カメラを隠す」
「……嫌です、拒否します、フランバンジーの侵害です」
「それは前に高坂が間違って言ったやつだろ!?」
「失礼。プライバシーの侵害です」
こいつ…段々ボケに磨きが掛かってるな（当社比）
「あ、勿論夢先輩のも撮ってあるよー」
「ほほう。撮らなくても良いものでも撮っていく…君は優秀なカメラマンだな凛ちゃん」
残念ながらパパラッチとしてだけど。
しかし、それは興味がちょっと津々。さてさて、どんな素晴らしい私が映っているのやら。
「……」
しかしそこには！スキンシップと名打って花陽ちゃんに絡みまくる千里川夢の姿があった！
「…」
「夢ちゃん…？」

「ゆーめちゃん？」
「夢……？」
私の幼馴染み達が怖くて夜も眠れない。そんなタイトルがあった気がします。
いや知らないけど。
「弁解させて下さい」
「許可します」
「……」
しまった！勢いで言ったけど言い返せる言葉が見つからないぜ！弁解も弁明も土下座（そもそも出来ないが）も出来ない完璧な詰みだ！
というか確実に有罪だ。
「すいませんでした」
被告人千里川夢の自白によってこの事件は終結した。
自と白って似てるよね。
「……コホン。でもまぁ、こんな映像だと生徒会長が何を言うかわかったもんじゃないな」
「露骨に話逸らしたね夢ちゃん」
うっさい。もういいんだよそんな過去の話。今を生きてるんだから私達は（？）

「でも確かに…音ノ木の学生がナマケモノに見られるわぁ、とか言われそう」
「言いそう。ちゃんとしたの撮らないとなぁ。今のところナマケモノとスマイルとセクハラだしな」
「夢ちゃんのが一番酷いけどねー」
「南…お前って時々笑顔でＤ４Ｃするよな…」
「でぃーふぉーしー？」
ちなみに、『いともたやすく行われるえげつない行為』のこと。ジョジョ読んでる人ならわかるはず。
こんなの日常会話に組み込むのがおかしいけどね。
「？」
残念なから幼馴染みにはわからなかったようだが。畜生、後でにこ先輩とジョジョ談義してやる。ちなみに私はＤＩＯ様が好きです。
「…んー？そういうば、ことりちゃんの映像見てないような…」
「確かに、そういえば見てない」
「…え？」
「この際だ、私らだって赤裸々にされたんだ、南のも晒してくれる」
「え？え？」

どうでもいいけど、赤裸々って平仮名にするとキラキラネームみたいだよね。
「よし！高坂穂乃果！行きます！こっとりちゃんのー、鞄のなーかを～」
ヒョイ
「……」
「……」
「……おい、なんで鞄を取る」
「…嫌…」
「…なんかお前のはリアルだな…」
「なんでもないよなんでもないよなんでもないよなんでもないよなんでもないよなんでもないよなんでもないよ」
「壊れたオモチャみたいに繰り返すな！怖いだろうが！」
壊れたというより怖れた。
「ちょっと!?取材が来るって聞いたんだけど！本当なの!?」
そこに、勢いよく開けられた扉のからにこ先輩襲来。
「ってなにこの空間…私の部室…カオス過ぎ…？」
まぁそう言わないであげて下さい。私もそう思いますので。
「いや、今来たとこだけど、この原因、あんたも一任してるでしょ」

「あ、バレた？」
「一任というより原因の一人でしょうがぁ！」
テヘペロ。
「言っとくけど、それしても許されないからね」
駄目でした。無念。